

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 5 号

特集 蓮池

I 川袋低湿地形成と

蓮池の発遷(序説) ----- 渡部 瞭 ----- 1

II はす池自然公園

—みんなで守ったはす池の自然

----- 桑原 玲子 ----- 33

橘通りの今昔 ----- 梶倉 健 ----- 39

岸田劉生の鵠沼風景

—「藤沢の山」か「片瀬の山」か—

----- 伊藤 聖 ----- 48

昭和20年3月10日—鵠沼と東京— ----- 長谷川襄二 ----- 57

ニェアールの生地 昆明市訪問

----- 関根 久男 ----- 60

「鵠沼を語る会」活動の記録 ----- 総務委員会 ----- 63

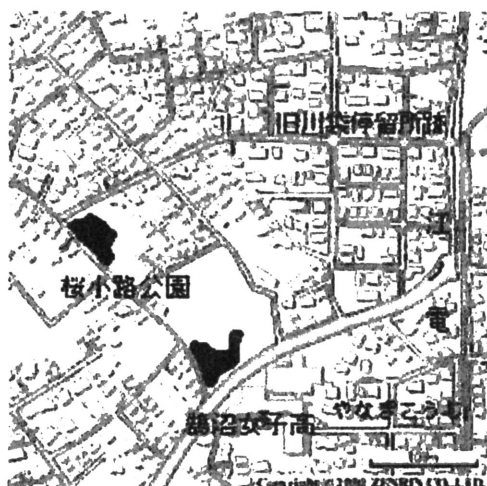
編集後記

『新編相模風土記稿』(天保13年、1842)に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

特集 蓮池



I. 川袋低湿地形成と蓮池の変遷(序説)

渡 部 瞭(会員・藤沢メダカの学校をつくる会会員)

はじめに

鷺沼のくげぬま小田急線以東で少年時代を過ごした方なら、〈蓮池〉で遊んだ思い出をもっておられるに違いない。メダカやクチボソ(モツゴ)やマッカチン(アメリカザリガニ)、オンジョ(ヤンマ)をはじめとするトンボ・カゲロウの仲間やミズスマシ、ゲンゴロウ、タガメ……。蓮池やその周囲には子どもたちの遊び相手はいくらでもいた。手網や餅竿を手にした子どもたちの声は、日暮れまで絶えなかった。

池は、川名の谷戸をねぐらにするコサギやゴイサギのよい餌場となっていたし、水面から突き出たヨシにはヨシキリが賑やかな声を立てた。

夏になると、朝早く蓮の花が開くかそけき音を聴きに別荘族が杖を曳き、池畔に画架ががを立てる日曜画家や三脚を構えるカメラマンの姿を見かけた。

周辺には狭いながらも稲田いなだが拡がり、夏の夜には別荘の窓に涼風がカエルの合唱の賑わいを運び、秋には草むらにすだく虫の合唱に代わった。冬にはカモたちが渡りの羽を休めた。凍結した池でスケートのまねごとをする勇敢な少年たちもいた。

鷺沼南東部の別荘地開発は、東海道線や江ノ電の開通と共に本格化し、関東大震災、小田急江ノ島線の開通、太平洋戦争、朝鮮特需、高度経済成長と、さまざまな時代の流れの中で進展し、別荘地から定住の高級住宅地、さらには一般住宅地へと変貌した。

しかし、蓮池とその周辺の、周囲を砂丘で囲まれ、わずかに東が開けた盆地状の低湿地(仮に〈川袋低湿地〉と名付けておこう)は、江ノ電柳小路駅からほど近いにもかかわらず、鵠沼地区の中では最後まで水田が残り、宅地化から免れた一画である。

鵠沼地区の水田地帯は、古来集落のあった引地川流域から発達したと考えられる。鵠沼神明地区の上村にあった上の田が最も古く、湘南新道付近の下沢、そして引地川の改修によって拡大した堀川(八部)の水田が最大のものだった。境川流域には現在の鵠沼東にあった奥田と、この川袋低湿地の水田があった。境川流域の水田は、片瀬との境界線をまたいでいた。

これら鵠沼の水田地帯はいずれも、水はけの良い砂地が一般的な湘南砂質地帯にあって、河川の曲流(蛇行)が残した河跡湖(三日月湖)とその周辺の後背湿地を利用したものと考えられる。

さて、この川袋低湿地はどのようにして形成されたのだろうか。古い古い昔のことから話を始めよう。

1. 相模野台地の形成と境川

神奈川の大地の形成 現在地球科学の主流とされるプレートテクトニクス理論によれば、地球の表面は 14 枚程度のプレートに分かれていて、それらが地球内部から湧き上がるマントルの対流によって移動し、2 つのプレートがぶつかるところには大山脈や海溝を形成し、分かれるところには海底火山の噴出による海嶺と呼ばれる海底山脈や地溝帯と呼ばれる割れ目を形成する。

神奈川県の地形形成は、北米プレートとユーラシアプレートの境目に南側からフィリピン海プレートが北上して衝突してくるという現象と大きく関わっている。それまでユーラシアプレートの下に潜り込んでいたフィリピン海プレートが、衝突してくるようになったのは数百万年前からで、深海底に堆積した小仏層を押し上げて小仏山地を形成し、そのエネルギーが北米プレートとユーラシアプレートの境目にフォッサマグナの割れ目を押し広げたらしいというのが、最近の学説である。

さらに第2波として、フィリピン海プレート上で活動した海底火山の堆積物(緑色凝灰岩=グリーントフ)が衝突し、丹沢山地を形成した。丹沢山地の中央部には、地下の深部から石英閃緑岩が突き上げてきて、ドーム状の構造をもつ山塊ができあがった。

第3波として、やはりフィリピン海プレート上で活動した海底火山が活動を続けながら衝突したのが伊豆半島だと説明されている。この時のエネルギーは海底に堆積した地層を押し上げ、足柄山地や多摩丘陵から三浦半島を経て房総半島へ続く丘陵をつくった。伊豆半島の付着は第三紀と呼ばれる地質

時代の末期におこったが、次の第四紀にはいと、付着した伊豆半島の北部に箱根や富士山といった火山の活動が活発になる。

相模野台地 第三紀に盛り上がった丹沢山地から流れ出す川は、現在の相模川のおおもとで、小仏山地との間に深い谷を刻みながら東方へ流れ、〈古東京湾〉ともいうべき東の海へ流れ出し、広大な平野を堆積させていった。ところが、第四紀になると下流部に隆起してきた多摩丘陵にさえぎられて、南の相模湾に向きを変える。そして、平野の上に巨大な扇状地を形成していった。これが次第に隆起したのが、現在〈相模野(相模原)台地〉と呼ばれる洪積台地だ。現在の相模野台地は、丹沢から流れ出す城山町付近(扇頂)でおおよそ 140m、末端(扇端)の藤沢の伊勢山付近でおおよそ 50m の標高をもつ。すなわち 50m 程度の隆起量をもち、北から南に向かって傾斜している隆起扇状地だ。その構成物質は、単に河川が運んできた円礫の堆積物(相模野礫層)だけでなく、基盤に貝化石を含む海成層(藤沢砂泥互層)があり、表面にはスコリアやパミス(軽石)層を挟む関東ロームと総称される火山灰の風成層(陸上で堆積した地層)が厚く堆積している。これは、この隆起扇状地の形成過程においてかなりの隆起・沈降が繰り返されたこと、最終段階において、相当長い期間箱根や富士山の火山活動が活発だったことを物語る。

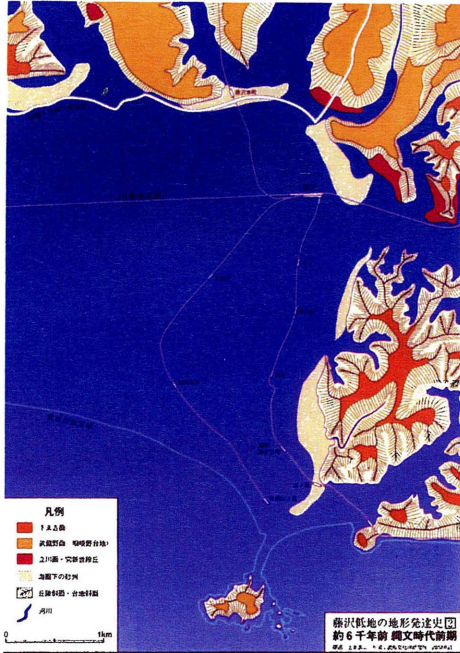
藤沢市における相模野台地の表面と、東側を流れる境川の谷底平野との比高をみると、南の善行付近ではほぼ 40m であるのに対し、北の湘南台～長後付近では 25m 程度しかない。長後より北側はまた徐々に高度を上げていく。このことは隆起量が一樣ではなく、長後付近を中心にたわんで隆起したと考えられる(これを撓曲という)。相模野台地の南端は、藤沢市から茅ヶ崎市にかけて、ほぼ直線的に比高 40m 近い急斜面になっている。まず断層崖が形成され、そこが今から 5000 年ほど前までに浸食された海食崖(海岸にうち寄せる波の力で削られた崖)とされる。[→5 ⑤]

扇状地の表面は、二枚貝の貝殻の片方を伏せたように、山地からの出口(扇頂)が高く、扇端に向かって緩やかに傾斜している。一見のっぺりした地形だが、よく見ると扇頂から放射状にわずかな谷が何本か見られることが多い。極端に言えばハマグリよりもアカガイの貝殻のようなものだ。この谷はかつての流路の痕跡である。この隆起扇状地の隆起量は、東側が大きく、西側が小さかったため、相模川本流は東から西へ移動し、現在は茅ヶ崎市と平塚市の境界を流れている(無論、川が先にあって、それを境界としたのだが)。

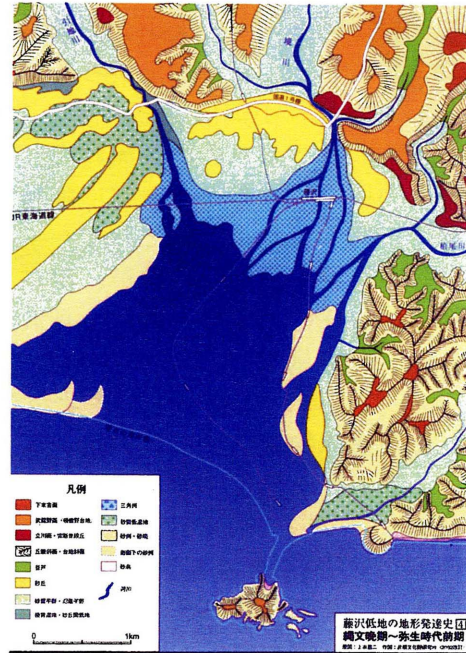
相模野台地のように扇状地が徐々に隆起すると、この流路の痕跡に水流が復活し、隆起量に応じて谷を深くする。すなわち、この谷川と台地面の比高が隆起量を示す。境川や引地川とその支流の谷はこのようにして形成された。

境川は高尾山と城山湖の間にある草戸山(364m)の大地沢が源流で、多摩

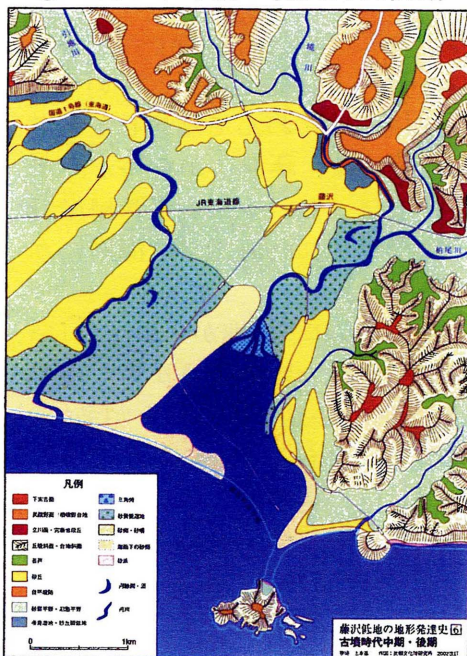
藤沢低地の地形発達図



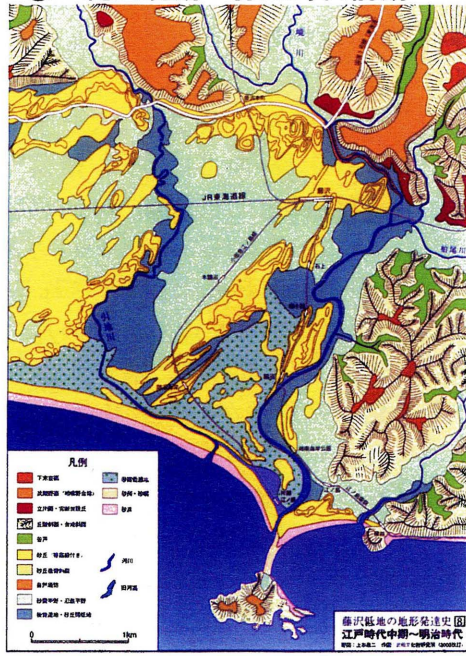
① 約6千年前 縄文時代前期



② 縄文晩期～弥生時代前期

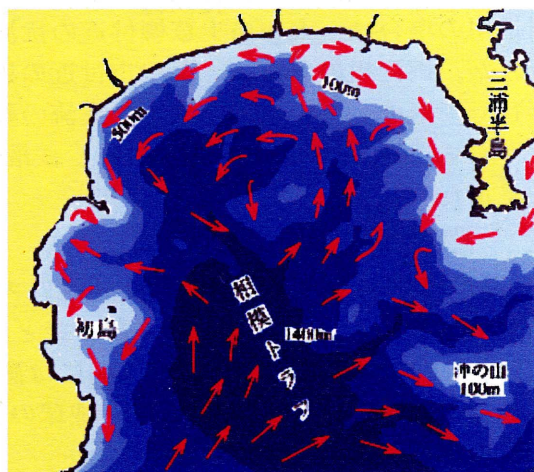
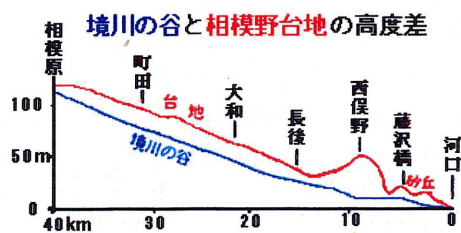


③ 古墳時代中期・後期

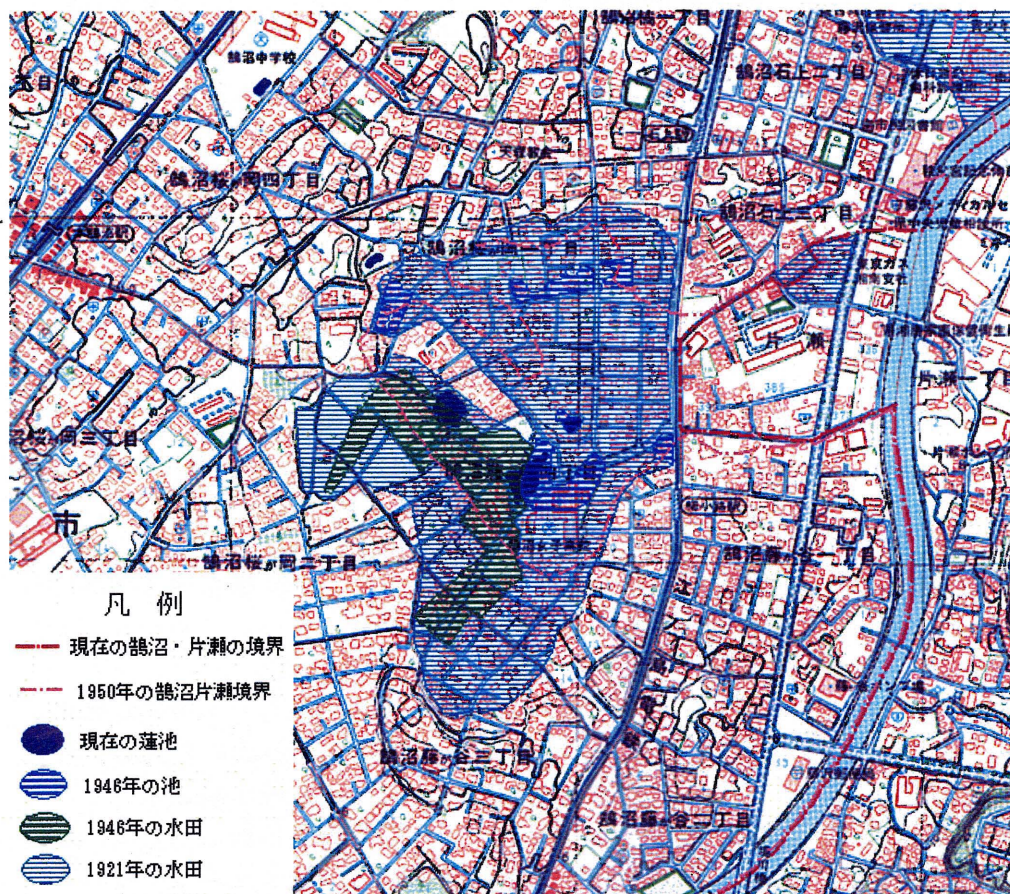


④ 江戸時代中期～明治時代

原図：上本進二 作図：東国文化財研究所 (2002 改訂) 『ふじさわの大地』より



- ↑⑤ 境川の谷と相模野台地
→⑥ 相模湾の海底地形と海流
↓⑦ 川袋低湿地



丘陵と相模野台地の境目付近(扇側)を比高 40m 程度の谷を刻んで流れ下る。引地川の場合は、大和市上草柳付近の伏流水を水源とする全長 20km 程度の流れだ。両河川の本流は、藤沢市付近の場合、ほぼ南北方向の直線的な谷を平行して形成している。台地上の支流の数は少なく、境川の場合は多摩丘陵側からの支流がかなり発達している。最大のものは藤沢駅東方で合流する柏尾川だ。

2. 縄文海進

10m高かった海面 地球上には案外短いスパンで海面の下降・上昇、すなわち平均気温の下降・上昇の波があることが知られている。いわゆる氷期(氷河時代)と間氷期である。この原因には諸説があるが、惑星としての地球の自転軸の傾きと、公転半径(太陽と地球の距離)のずれから来るもので、約 10 万年の周期があるとする説が有力だ。

現在から振り返って最後の氷期は〈ヴュルム(ウルム)氷期〉とヨーロッパで呼ばれるもので、その後半の時代、今から 3 万年ほど前に藤沢市域の相模野台地の表面に人間生活が始まったらしい証拠が見つかっている。まだ土器をもたない先土器時代の遺跡だ。ヴュルム氷期の最盛期には、海面は現在よりも 10 ～ 12m 程度下がったと考えられている。江の島は今よりもずっと大きく、平地の上の小山あるいは半島になっていた。境川や引地川の谷もずっと深かったに違いない。

今から 1 万年前ころに氷期は終わり、間氷期にはいった。その前後から世界の多くの地域でホモ=サピエンスによる新石器時代が始まる。日本の場合には縄文時代と呼ばれる。

間氷期にはいった縄文時代には、気温が上がり海面も上昇した。海面が最も上昇したのは、今から 6000 ～ 5500 年ほど前で、藤沢付近では現在の海面よりも 10m 程度高かったと思われる。そのため、海の面積が広がり、境川や引地川の谷は細長い入江となった。これを〈縄文海進〉という。この細長い入り江を取り巻く台地の表面には、入り江に下りて魚介類を捕ったり、台地に群れていたイノシシやシカを狩ったりして暮らしていたであろう縄文人の集落跡がいくつも見つかっている。[→ 4 章①]

境川や引地川の流路に沿う平野の断面図をつくってみると、相模野台地からの出口から上流に 1km 以上にわたる全く水平な部分が認められる。現状は、引地川の場合は明治小学校以北の大庭の水田地帯と遊水池となっているところで、藤沢北高校付近までであり、境川の場合は旧藤沢宿以北の、最近侯野遊水池が造成されたあたりまでである。双方共に遊水池がつくられているということは、ここが水害常襲地帯であることを物語る。

ここの標高は、ぴったり海拔 10m の水平面なのだ。このことから、比較的最近まで静水面、すなわち入江か湖沼だったことが想定できる。この場所が静水面だった理由としては、両河川の谷の出口が西から東に流れる沿岸流が運んでくる砂が砂嘴^{さし}という細長い砂の半島を形成し、入江の口を塞いで湖沼^{せきこ}(潟湖=ラグーン)になったこと。先述した撓曲によって下流側の隆起量の方が大きかったために水が溜まりやすかったことが考えられる。この時の砂嘴は後にはかなりの高まりをもつ砂丘に発達した。境川の場合は旧藤沢宿の南、藤沢小学校が建つ砂丘、引地川の場合は明治小学校が建つ砂丘だ。

縄文海進のピークが過ぎて海面が下がり始めると、入り江あるいは潟湖の段階は過ぎたが、歴史時代に入ってもこのあたりは湖沼であり続けたと考えられる。

大庭谷底平野 明治小学校の東約 200m に柏山稻荷神社がある。大庭城主大庭景親が城の護りのために引地川を堰止める水門をつくり、その水門の護り神として勧請^{かんじよう}した。境内池の中にある巖島千人力弁天社が、昔水門のあったところといわれている。

引地川の谷にライフタウンから小糸川という支流が小さな谷をつくって合流してくるあたりに〈舟地藏〉というバス停がある。バス停の名は近くに立っている石造の舟に乗った地藏菩薩坐像に由来する。お地藏さんは道路の拡幅によって移動させられ、周辺は小公園になっている。小公園に立って北を見ると、関東ロームの崖が見える。よく観察すると赤褐色のロームに挟まれて2本の白いすじのような地層が見られる。下の薄い方は三浦軽石層、上の厚い方は東京軽石層と呼ばれる6万年ほど前の火山活動によって堆積した軽石の層だ。崖の上は〈大庭城址公園〉になっている。この城址公園周辺は、先土器時代、縄文時代、弥生時代、さらには奈良時代に至る集落跡が折り重なって発見されている。また、遅くも平安時代末期には大庭氏の拠点となり、鎌倉時代を経て、室町に扇谷上杉定正の執事だった太田道灌^{どうかん}(江戸城の築城で有名)によって本格的な城塞が造られ、戦国時代に北条早雲によって奪われ、後北条が太閤の小田原攻め^{たいこうせ}で攻め滅ぼされるまで、主は代わっても城塞であり続けた。藤沢市の歴史を見る場合、最も時代的な層が厚い重要な地点だといって過言ではない。

この舟地藏には伝説が残されている。

北条早雲の大庭城攻めの際、迎え撃つ城側は、引地川を谷口で堰き止めて、一時的な湖水をつくり、それを内濠としたために北条軍は攻めあぐんでいた。そこへ一人の老婆(農夫とも)が現れ、堰を破壊すると水が干上がることを教えたため、北条軍は大庭城を攻略できた。ところが、北条軍は秘密が漏れることを恐れてこの老婆を殺害してしまった。これを哀れんだ村人は、老婆の

亡骸^{なまがら}をねんごろに葬り、供養^{くよう}のために舟地蔵^{てうぢざう}を造立^{ぞうりゅう}したというものだ。

これらの伝説は史実かどうか定かではないが、水平な引地川の谷底平野は、さほど高くない堰^{せき}でも広大な人造湖をつくることができることを示唆^{こくそく}して興味を引かれる。

3. 湘南砂丘地帯の形成

海退はじまる 縄文海進がピークを過ぎた 5000 年前ころから、相模野台地南面の海食崖より南側の浅い海底が海面上に姿を現し始めた。このような砂質の浅い海底が陸化してできる平野を海岸平野という。

海岸平野を構成する物質は、沿岸流(海岸線に沿って流れる海流)によって運ばれてきた砂が、寄せ波によって渚にうち寄せられたものだ。渚には貝類が生息するので、しばしば貝殻を含む。藤沢市の海岸平野(湘南砂丘地帯の東半)の場合、砂の構成を調べてみると、丹沢山地の岩石とほぼ一致し、一部火山噴出物を含む。つまり相模川が運んできて、海に吐き出した砂だ。また、引地川や境川の砂も若干含まれる。茅ヶ崎や辻堂海岸の渚には平たい円礫^{えんれき}が見つかることがあるが、鵠沼や片瀬の場合、海岸線にも内陸の砂地にも礫が含まれることは稀である。相模川の河口から離れているためだと説明できる。

相模湾の沿岸流について見ると、西半分では反時計回りだが、東半分では時計回りだ。[→5頁⑥]

この理由には2つの要因が考えられる。

その1は湾口部の中央に伊豆大島があることだ。日本海流(黒潮)の一部は三浦半島まで行く前に、大島にぶつかって相模湾内の中央部に入ってくる。

その2は相模湾の海底地形と水深が西半分と東半分とでは著しく異なる点だ。東半分にあたる湘南海岸から三浦半島西岸にかけては、狭いながらも陸棚(浅い平坦な海底)が認められ、その先は海脚と呼ばれる尾根状の地形と海底谷が交互にひだを形成して相模トラフに落ち込んでいる。ところが西半分、特に小田原市国府津^{こくふづ}以西は、いわゆるドン深で、いきなり 1300m の相模舟状海盆まで沈み込んでいる。北米プレートとフィリピン海プレートとの境界をなす相模トラフだ。相模湾の東側に海水浴場が並んでいるのに対し、西半分ではマリンスポーツが盛んでないのは、単に東京からの距離だけが理由ではない。相模湾東部の沿岸漁法が地引き網や投げ釣りであるのに対し、西部では定置網と磯釣りが見られるのもこのためだ。

大島にぶつかった日本海流の一部は、陸棚の壁に沿って北上し、相模川が形成した相模海底谷めがけて進んでくる。そして、相模川河口付近で東西に分かれる。

そういうわけで、茅ヶ崎市から藤沢市にかけての相模湾奥における沿岸流は西から東に向かい、片瀬山丘陵や江の島にぶつかって沖に逃げる。このために引地川・境川は河口部が東に曲流する。沿岸流に運ばれた海砂が河口部に砂嘴(細長い砂の半島)を形成するためだ。江戸時代初期の絵図には、引地川が境川に流入する姿を描いたものも残っている。また、陸地と江の島の間に陸繋砂州(トンボロ)を発達させ、江の島を陸繋島にした。

そもそも海岸平野における砂丘列が海岸線に平行する理由としては、次のように考えられている。

砂丘の形成 砂浜海岸にうち寄せる波は、渚で速度が速くなるためエネルギーを増し、渚の砂を侵食して陸上に運ぶ。押し上げられた砂は波のエネルギーが減退する高さに堆積して、海岸線に平行した細長い高まりをつくる。これを浜堤(バーム)という。波が引くときにも、渚で速度が速くなるためエネルギーを増し、渚の砂を侵食して今度は海底に引き込む。引き込まれた砂は波のエネルギーが減退する深さに堆積して、海岸線に平行した細長い高まりをつくる。これを沿岸州(バー)という。沿岸州は引き波だけでなく、沿岸流による運搬物も堆積させる。

波の強さは表面を吹く風の風力や風向によって常に変化するから、浜堤や沿岸州も日常的な波によるものと強い波によるものと2～3列が平行して形成されているのが普通である。沿岸州は海底にあるため観察しにくいが、大潮の干潮時には海面に姿を現す場合がある。また、寄せる波を観察してみると、波頭が崩れる位置は渚から一定の距離であることがわかる。沿岸州で押し上げられて崩れるのだ。沿岸州がきれいに続いている場合、寄せ波のバランスと適合すると、波頭が一斉に崩れてパイプラインと呼ばれる見事な管状になるときがある。サーフィンとは、こうした寄せ波の性質をうまく利用したスポーツだ。

砂浜の傾斜がきわめて緩やかで、島陰などのため寄せ波の力が弱い場合、浜堤は余り発達せず内陸まで波が寄せ、それが引き波になる頃には次の寄せ波が打ち寄せるように見えることがある。このような波を片瀬波といい、江の島の島陰にあたる片瀬東浜の波がそれにあたる。片瀬の地名はそれによって名付けられたという説もある。片瀬波は寄せるばかりだということで、古来、男女の間の片想いに掛けて歌に詠まれたり流行歌に歌われたりすることもあった。

閑話は休題しよう。

このような海岸線に平行した浜堤や沿岸州が、地盤の隆起あるいは海面の低下によって海岸平野になると、海岸砂丘列となる。通常海岸部では、気圧配置が安定しているときは昼間は海から陸に向かう風(海軟風)が吹き、夜間

は陸から海に向かう風(陸軟風^{りくなんふう})が吹く。太陽エネルギーの強い昼間の海軟風の方がはるかに強く吹き付けることは、海岸部に生えている樹木が海から陸に向かって偏形していることでたやすく判断できる。湘南海岸にはクロマツやトベラなどの防風防砂林が植栽され、若木はよしずなどで護られている。

この強い風の吹き寄せによって、陸化した浜堤や沿岸州が形成した海岸砂丘列は成長する。

本州の典型的な海岸平野としては、太平洋側の鹿島^{かしま}、九十九里、遠州など、日本海側の新潟平野^{にいがた}などが知られている。これらに共通する特色として、海岸線が緩やかな弧状であること、海岸線に平行する砂丘列が見られることが挙げられる。湘南砂丘地帯の場合はどうかというと、現在の海岸線は緩やかな弧状をなしており、平塚市から茅ヶ崎市にかけては海岸に平行する砂丘列が認められる。ところが藤沢市の砂丘列は、最北部・中間部・最南部の3帯に分けられ、最北部と最南部は海岸線と平行する。しかし、中間部の砂丘列は、辻堂付近では東北東—西南西方向、鵠沼中央部では北東—南西方向、鵠沼東部では北北東—南南西方向、片瀬では南北方向と、東に行くに従って海岸線とは直交するような角度をもつに至る。そしていずれも北側が標高が高い。

その理由としては、かつては卓越風^{たくえつふう}の吹き寄せが論じられていたが、他の海岸平野では余り見られない現象なので、疑問視されていた。すなわち一旦海岸線に平行に形成された砂丘列が、卓越風による吹き寄せによって、北東—南西方向に偏向し、相模野台地や片瀬丘陵に近づくと風向が偏向し、北部では東西、東部では南北方向になるというものだ。この地方の卓越風とは冬季の季節風、いわゆる木枯らしで、北西風を〈ナレエ(慣い)〉、西風を〈ニシ〉と呼び慣わす。しかし、海軟風との相殺もあってか、とくに顕著な風とはいえない。砂丘上のクロマツの偏形もさほどとはいえない。また、冬季に成長するムギの新芽を飛砂から護るために、畑に麦わらを挿す光景は、湘南砂丘地帯の風物詩といった風情だったが、その方向も必ずしも一定していない。

近年の研究により、湘南砂丘地帯東部、すなわち藤沢市南部低地の形成が、各種土木工事時のボーリングコア、考古学的な遺物の分布など、多角的に論証され、明らかになってきた。

それらによると、湘南砂丘地帯の基盤には、表面の深度が北部で海拔0m、海岸部で海拔-20m程度の南に傾斜する第三紀層^{こうしきそう}があり、その上に北に厚く南に厚い円礫の河成層が載っている。これは、洪積世前半の縄文海進以前に形成された扇状地と推定できる。そしてその表面に縄文海進期に沿岸流が運んできた相模川が吐き出す海砂が厚く堆積しているのである。

縄文海進がピークを過ぎた 5000 年前ころから、この砂質の浅い海底が、海面の低下と、相模トラフにおけるユーラシアプレートとフィリピン海プレートとの境界面の摩擦から起こる地盤の跳ね上がりという要因により、陸化して海岸平野が生まれてきた。この地盤の跳ね上がりは、ほぼ平均して 70 年に 1 度起こり、マグニチュード 7～8 程度の巨大地震を引き起こしてきた。最近のものが 1923 (大正 12) 年の関東地震であり、それからすでに 80 年になろうとする現在、いつ大地震が起きてもおかしくない。1923 年関東地震においては、鵠沼海岸で約 90cm、江の島においては 2m 弱の隆起量が観測されている。

古鵠沼湖 相模川以東の湘南砂丘地帯の形成は、西部と東部、大まかにいうと茅ヶ崎市と藤沢市とはかなり違っていただろう。西部では内陸部からの大きな河川の流入がなかったためか、旧海食崖に平行するように北から南に徐々に陸化が進んだのに対し、境川・引地川が流入する東部では、両河川が以前に形成した侵食谷が海底に隠れているため、堆積物の収縮が見られ、地盤の上昇が遅れた。すなわち、かなり広い湾入部が形成されていたと考えられる。その西岸は北東―南西方向の直線的な海岸線をもち、そこに形成された浜堤や沿岸州が陸化して北東―南西方向の海岸砂丘列を形成したのではないかと見られるのである。[→ 4 頁②]

この湾入部が次第に狭まると、かつて湾内に流入していた沿岸流は、江の島にぶつかって沖へ逃げるようになり、湾口部に現在の海岸線の方の砂嘴を発達させ、やがて湾口をふさいで湾を潟湖(ラグーン=砂州によって外洋から距てられた海。多くは汽水湖→淡水湖と変化する)に変えた。この〈古鵠沼湖〉ともいうべき潟湖は、境川・引地川が形成する三角州によって、急速に埋め立てられていった。これはおそらく古墳時代以降、つまりここ 1500 年来のできごとである。[→ 4 頁③]

従って、鵠沼北西部や東部の陸化が終了し、人間生活が営まれはじめたころになっても、南東部は潟湖だったと考えられ、そのうち最後の最後まで残ったのが川袋低湿地ではなかったろうか。現在でもここは海拔 4m 以下しかなく、住宅が建っている地面としては鵠沼で最も低い。うっかりすると海岸の海の家より低いのだ。

4. 曲流と低湿地の形成

河川の蛇行 境川(片瀬川)を河口から遡ると、新屋敷橋あたりまで両岸にプレジャーボートの不法係留が目立つ。これははからずも、舟で簡単に航行できる流れだということを示している。実際に舟で航行できるのはさらに上流までで、本流の場合はかつて奥田堰が造られたあたりでようやく〈瀬〉と呼

べるような急流になる。鎌倉三代将軍実朝^{さねとも}の時代、宋^{そう}(中国)に渡る貿易船をこの地の木材で建造したが、堅牢すぎて浮かばなかったといういい伝えもある。この時に全国から集められた船大工が住み着いて大鋸挽きになったというのだ。これが大鋸^{だいごり}という地名の起こりとなり、舟玉神社^{ふなだま}が祀^{まつ}られる。

支流の柏尾川の場合はもっと上流までで、(大船^{おほふね})の地名は(栗船^{あわふね})から転じたものだという説がある。途中の(深沢^{ふかさわ})も、歴史時代になってからも深い沼沢地が残っていたことを暗示する。

こうして判ることは、鵠沼地区を流れる境川(片瀬川)の河面高度がほとんど海面高度と変わらず、水平に近い河底傾斜しかもたない。満潮時には海水が遡^{さかのぼ}る感 潮河川だということだ。

このような水平に近い緩傾斜地を流れる河川は、蛇^{とこ}が進行するときのように曲がりくねった流路をもつ。これを曲流または蛇行といい、それを妨げる条件がない場合、自由蛇行と呼ばれる。これは地球の自転で生じるコリオリの力による螺旋流のためと説明される。流体力学とコリオリの力について説明するとかなり面倒なので、ここでは省略させていただく。結果だけをいうと、地球表面を移動する物体は、川の水でも風でもあるいは鉄砲玉でも、真っ直ぐには進まず、北半球では進行方向の右へ、南半球では進行方向の左へずれるというものだ。川の水の場合は、ある程度まで進行方向の右へずれると、最大傾斜線とは異なる方向へ向き、そこから今度は左に最大傾斜線へ流路を戻そうという力が働く。すると再びコリオリの力で右へ向く。こうして右へ左へと交互に流路を変えるので、蛇行するのだ。

ことに海岸平野のような砂地の場合は、侵食がたやすいので、出水のたびに流路が変わることが普通である。鵠沼付近でも、明治以降近代的な測量法に基づく地形図が作成されるようになってからも、測量年度が替わるごとに境川や引地川の流路は変化している。また、江戸時代の絵図においても、全く同じ流路が描かれている絵図はない。河道は常に変化していたのだ。

氾濫原と河跡湖 流路の変更は氾濫によって引き起こされる。河川が河道を外れて氾濫すると、流水のエネルギーが急速に減少し、それまで運搬してきた土砂を河道の外側に堆積する。このようにして河道の外側に緩やかな堆積物の高まりが形成される。これを自然堤防^{しぜんていぼう}という。自然堤防が形成されると、氾濫した水はもとの河道に戻れなくなり、別の河道をつくる。このようにして流路の変更が行われるのである。

新たにできた河道の両側にも、氾濫時には自然堤防が形成される。自然堤防^{しぜんていぼう}によってもとの河道に戻れなくなった氾濫水は、周辺に滞留し、後背湿地と呼ばれる低湿地を形成する。後背湿地^{かさいし}にはもとの河道の名残が細長い池沼^{いけ}となつて残る。これを河跡湖あるいは三日月湖と呼ぶ。こういう箇所^{ところ}の河道

は曲流(蛇行)している場合が多いため、河跡湖は三日月形の弧を描く場合が普通だからだ。英語で Oxbow lake(頸木湖)というのも同様の発想だ。

氾濫は自然現象である。沖積平野、すなわちここ 1 万年前以降の扇状地や三角州などの河川による堆積地形は、氾濫によって形成されてきた。従って、沖積平野に住むときには、氾濫に遭遇することを覚悟しなければならない。氾濫が人間生活に被害を与えた場合、初めて〈水害〉という名が与えられる。人が沖積平野という地形を利用して、それを生活の場としたのは、水田耕作という生産手段を選んだときからだ。日本の場合、それは弥生時代とともに一般化する。

鵠沼の場合、そのスタート段階から水害に遭遇する宿命を担っていたのだ。

川袋低湿地は、四方をほとんど砂丘で囲まれている。北東部にわずかに砂丘の切れ目があるのみだ。この切れ目から流入した境川の氾濫水は、出口を失って長期間滞留したであろう。そうした中を境川はそれこそ自由に蛇行したに違いない。

このような土地を先人たちはいみじくも〈川袋(河袋とも)〉と名付けた。深く屈曲した川に囲まれた地形を言い得て妙ではないか。引地川下流には〈地藏袋〉の地名もあった。東京の〈池袋〉や〈沼袋〉という地名もよく知られている。このようなものを〈袋地名〉と呼ぶ人もいる。

5. 「境」川の由来

太閤検地から 今日、〈境川〉の名で呼ばれている河川は、古来さまざまな呼び名をもっていた。現在でも柏尾川(かつては戸部川とも)合流点から下流を地元では〈片瀬川〉と呼ぶことが多い。この片瀬川の名は案外古く、平安・鎌倉期の記録には方瀬川、江戸時代には固瀬川と記されている。藤沢市域における上流部には音無川・俣野川・高座川などの呼び名が見える。『天養記』に 1145(天養 2)年に源義朝が鎌倉より俣野川を越えて大庭御厨鵠沼郷に不法に侵入したという事件が出ている。鵠沼の名の初出だ。義朝が鵠沼は鎌倉郡だと難癖をつけたのは、流路が変わる川を境界としたからであろう。

1594(文禄 3)年に行われたいわゆる〈太閤検地〉の記録には、「高座川を相武の国界とし、境川と称す」とあり、これがこの川が境川と呼ばれるようになった所以とされる。もっとも、相武(相模と武蔵)の国界となった部分は上〜中流域であり、下流部においては高座郡と鎌倉郡の郡界であった。

自由蛇行と飛び地 いったい、河川をもって支配領域の境界となすということは、古今東西を問わず広く見られるところである。古代エジプトにおいては、ナイル川が生の世界と死の世界との境界をなすとも考えられていた。古代ヨーロッパにおいてはドナウ・ライン両河川がローマ世界とゲルマン世界

の境界であり、民族・言語からワインとビールまで、あらゆる文化の境界線となったことはよく知られている。

河川をもって支配領域の境界となす場合、沖積平野や海岸平野のような、侵食がたやすく、大雨のたびに流路がつけ変わるような場所では、困った問題が起きてくる。流路がつけ変わるたびに境界線も変わるのではまずいからだ。測量技術が発達してくると、一旦確定した境界線は、流路が変わろうとも変更しないことで境界線を定めた双方が取り決めを行うことになる。ことに橋を架けにくいような大きな河川の場合、旧流路の境界線が残っていると、様々な問題が起きる。相模川下流部においては、左岸(東側)に平塚市の領域が食い込んでいるが、その住民は大回りして長い橋を渡らなければ、市役所にも行けない。また、多摩川下流部は、東京都と神奈川県川崎市との境界線となっているが、双方に等々力^{とどうき}があったり、東京都に上野毛、川崎市側に下野毛^{しもものげ}があったりする。1912(明治45)年に府県境界の変更がなされるまで、川崎の等々力は荏原郡(現在の世田谷区)等々力村の飛地だった。流路の変更によって川が村の領域の中を流れるようになると、村は分断され、飛地ができる。多摩川の兩岸にはこのような飛地が多く存在し、右岸だけでも上流から和泉・宇奈根・瀬田・下野毛・等々力・下沼部・矢口・古市場・原・古川・八幡塚・雑色などの各村の飛地があり、このような飛地をめぐる隣村との境界争いも各地で絶えなかった。このような例は全国にいくらかでも転がっている。中でも等々力村の場合、1717(享保2)年に小杉村と、また1824(文政7)年には宮内村との間で争論が起きている。1717年の境界争論の絵図の裏には幕府の裁定の文が記され、それに関わった幕閣^{ばつかく}の記名捺印がみられる。その中には大岡 越前守忠相の名もあるが、将軍吉宗が彼を江戸北町奉行に抜擢したのがこの年だ。彼は1712(正徳2)年伊勢山田奉行に就任し、この山田奉行時代に紀州と松坂の境界線問題を厳正に裁いたことで吉宗がこの人物に注目したといわれる。とするならば、この等々力村・小杉村の境界争論は、彼の北町奉行としての初仕事だったのかもしれない。ちなみに旗本大岡家の知行地は茅ヶ崎市内にあったことはご存知の方も多だろう。

村同士の境界線争いならば、奉行所の裁定を仰げば良いが、国境線となると戦争にまで発展することもある。記憶に新しいところでは、イラン・イラク戦争の発端は、シャトル=アル=アラブ川(ティグリス・ユーフラテス合流点からペルシャ湾に注ぐまでの間)の国境線の位置をめぐる両国の見解の相違だった。

川袋の形成 さて、話を鵠沼に戻そう。

鵠沼地区の領域は、かなりの例外もあるが、ほぼ北は旧東海道～湘南通り～東海道本線～鎌倉道を結ぶ線、東は境川の流路、西は引地川の流路、南は

海岸線で囲まれた範囲ということができる。このうち、北部の境界線は人為的^{じんい}境界線だが、南部は自然的境界線、東西も大部分が自然的境界線である。

現在の地図で東部の境界線、すなわち鵠沼地区と片瀬地区との境界線を眺めてみると、境川の流路から外れて西に江ノ電の線路際までU字形に屈曲している部分があるのに気づく。これは明治期の旧流路の蛇行の跡だ。この蛇行がショートカットされて、現在の直線的な流路に付け変わったのは、1910(明治 43)年 8 月の台風による大洪水と 1917(大正 6)年 9 月末の暴風雨による氾濫後の改修工事によるとされる。ショートカット後も境界線は旧流路のままで残ったのだろうか。こういう話なら、その例は枚挙にいとまがない。

ところが、この鵠沼・片瀬の境界線のケースは疑問点が残るのである。

1882(明治 15)年測図の 1:20,000 陸軍迅速図^{じんすく}は、わが国が近代測量技術を欧米から学び最初に公刊した中縮尺図^{ちゅうしゅくしきず}だが、今日では復刻版も発行され、入手



しやすい。この図で件の部分を見ると、境川は見事に屈曲し、ほぼ現在の鵠沼・片瀬の境界線の位置を流れている。

つまり現在の鵠沼・片瀬の境界線は、この当時の流路を基準にしたものと考えられる。この当時は鵠沼地区は高座郡鵠沼村、片瀬地区は鎌倉郡片瀬村だったが、この迅速図には郡界線は記入されていない。しかし、1987(明治 20)年陸軍陸地測量部測図の 1:20,000 地形図には高座・鎌倉郡界が描かれている。これを見ると、驚くなかれ川袋低湿地の中を不自然なまでに屈曲している。ついでに奥田の水田地帯でも逆U字形の郡界線が見られる。これはどの時代の境川流路に基づくものだろうか。残念ながらこの郡界線通りの流路を示す地図を見たことはない。元禄 13 年につくられたという絵図[左⑧]が残っているが、この流路より単純な屈曲で、丸い川袋低湿地の中をえぐるように流れている様子が読みとれる。とするならば、1987 年の地形図に見られる郡界線を決定づけた流路は、太閤検地まで遡ることができるのだろうか。[→5 頁⑦]

⑧ 元禄絵図

石上の渡し(別名川袋の渡し)は現在上山本橋になっているが、かつては船を 2 艘ならべた橋があり、舟橋と呼ばれていた時代もあったらしい。それ以前は渡し舟で、天保年間には渡し賃が 1 人 5 文だった。また、ここから江の島へ直行する船便もあった。いわば〈水上バス〉のはしりである。時代により川筋が変わっていたため、それによって渡しの位置も変わったに違いない。渡し場の位置としてここが選ばれたのは、この下流で西に大きく曲流し、川袋低湿地に向かっていた時代が長かったことに由来するのではなかろうか。

さて、さらに疑問は続く。それは、現在の鵠沼・片瀬の境界線がいつ制定され、それがなぜ明治期の流路に基づいているのかという点だ。

高座郡鵠沼村は 1908(明治 41)年に藤沢大坂町・明治村と合併して高座郡藤沢町となり、1940(昭和 15)年に市制を敷いた。一方鎌倉郡片瀬村は 1889(明治 22)年に江ノ島村と合併して鎌倉郡川口村となり、1933(昭和 8)年に町政を敷いて鎌倉郡片瀬町と改称した。この鎌倉郡片瀬町が、鎌倉市に付くか藤沢市に付くかで大論争のあげく、住民投票の結果藤沢市と合併したのは、終戦直後の 1947(昭和 22)年になってからのことである。

合併ということになると当然境界線の問題も話題に上るであろうから、この機会に現在の境界線に変更されたのではないかと推測しやすい。ところが、事実は違うのである。その後、1951(昭和 26)年の藤沢市発行の地図でも、鵠沼・片瀬の境界線は昔のままに描かれている。では変更時点はいつだったのか。藤沢市役所の複数の課、藤沢市文書館で当たってみたが、現在までこの問題に対する解答は残念ながら得られていない。

6. 鵠沼開発と川袋低湿地

鵠沼開発略史 鵠沼地区、すなわち旧鵠沼村は、北西側と南東側とで性格が大きく異なる。

北西側は 1000 年以上の昔から集落が形成され、半農半漁の生活が営まれてきた。現在の鵠沼神明に点在する弥生中期以降の遺物包含地あたりから出発し、奈良期には高座郡土甘郷たかくらごおりとかみこうというまとまった村落が形成され、平安初期には石楯尾神社、後に土甘郷総鎮守ちんじゅとなる皇大神宮(神明社)が祀られ、平安末期には鎌倉権五郎こんごろうによって大庭御厨が形成された。今日、皇大神宮の祭礼に人形山車を繰り出す上村から堀川に至る 9 集落は、北から順次形成され、ほぼ鎌倉期までにはできあがったものと考えられる。

鎌倉期には、天皇の在所としん いしがみであった都から幕府のおかれた鎌倉に入る入口にあたる渡津集落として石上(砥上)が形成され、江戸初期には東海道沿いの街村、引地が形成された。これら 2 集落は、村落というより交通しんてんに関係する町場としての性格が強い。その後、鵠沼東部開拓の拠点として新田集落が形成された。この新田からは、中央部の砂丘列(北部では新田山、中央部では高松山と呼ばれている)の裾に沿って〈新田道〉が、当時の浜辺にあった出村なんやの納屋集落うしこまでを結んだ。納屋集落にほど近い新田道沿いには〈新田宮みや〉が祀られ、氏子には新田集落の旧家が名を連ねている。

江戸時代、この鵠沼村の全 600 石のうち、220 石(後に 250 石に加増)が旗本布施家の知行地、残りは旗本大橋家の知行地だったが、後に大橋家は上知し、幕領となった。どこまでが布施家の知行地でどこからが幕領であ

ったかの境界線は判然としないが、いわゆる本村の集落があったところが知行地、南東部の無人地帯は幕領だったのではあるまいか。それというのも、1728(享保 13)年、幕府鉄砲方=井上左太夫貞高が、鵠沼から辻堂を経て茅ヶ崎に至る海岸一帯に鉄砲場と称する実弾試射場を設置したからだ。

1882(明治 15)年測図の 1:20,000 陸軍迅速図〔→ 21 ページ〕によると、川袋低湿地は沼田記号(現在の地形図図式とは違うので注意)に覆われ、後に伊東将行らによって〈鵠沼海岸別荘地〉が開発されることになる鵠沼南東部一帯は家屋はおろか道路も見られない茫漠たる砂原であった。東西の砂丘列には針葉樹の記号が見られる(これも現在の地形図図式とは違う)。クロマツが自生していたのであろう。戦時中に聞いた古老(原集落在住)の話によると、「おれの若え頃にやあ、夙お飛ばすに江の島まで走って、何あんにもぶつからなかったもんだ」とのことだった。

鵠沼南東部の開発は、ベルツによる保養地の推奨をうけた海水浴場の開設と旅館鵠沼館の開業(1886(明治 19)年)、東海道本線の開通と藤沢駅の開設(1887(明治 20)年)というきっかけを得て本格化した。

この茫漠たる砂原のうち 250,000 坪は、維新以後幕府から大給子爵家^{おぎぎうししやく}に下り渡され、一時御用邸建設の予定もあったと聞くが、宮内省は御用邸を葉山に決定し、伊東将行らによって鵠沼海岸別荘地が開発されることになることは、賀来神社境内に残る〈鵠沼海岸別荘地開発記念碑〉の碑文に詳しい。

この鵠沼海岸別荘地は、格子状に直交する地割りと道路網を建設し、クロマツを植栽することから始められ、旅館も對江館^{たいこう}、東屋^{あずまや}が次々に開業した。道路網は北東—南西方向に伸びるものとそれに直交する北西—南東方向のもの^かとから成るが、北東—南西方向のものは一般的に長距離続き、中には海岸に達するものもあるのに対し、北西—南東方向のものは一般的に短く、どこかで砂丘か境川にぶつかってしまう。この方向は砂丘列に沿ったもので、後に敷設される小田急江ノ島線も砂丘列の方向に支配されている。

日本の家屋は南向きに建てるのが通例である。日当たりと通風を考えてのことだ。ところが鵠沼の家屋の場合、南東に向いていることが多い。砂丘列の方向に影響された地割りによる。これは鵠沼海岸別荘地ばかりでなく、本村の旧農家もその傾向が強い。さらに東屋など海岸の旅館も南東向きに建てられたが、これは客室からの江の島の眺望を考えての理由も加わったのだろう。皇大神宮、新田宮の社殿は敷地の形状にかかわらず南面している。

鵠沼海岸別荘地が開発された一帯は、鵠沼の中でも遅くまで潟湖だったところだ。陸化してからも境川が流路を変えつつ流れた時代もあったに違いない。ことに現在の一本通りから鵠沼公民館前の一帯は、鵠沼海岸別荘地開発からも外れ、小田急開通後もしくはらくは農地が見られた。ここは川袋低湿地

から後に松島苑住宅地となるあたりの砂丘を切って、最後の境川流路となったとも考えられる。あるいは分流だったかも知れない。いずれにせよ、一本通りから海岸通り(賀来神社前から大曲^{おおまがり}に向かう道)までの間は、砂地でありながら案外地下水位が高い。東屋に舟の浮かぶ広大な池があったことは、絵はがきにも残っているが、それ以外にも池をもつ邸宅は多かった。このことについては、別の会員が現在調査中なので、その報告を楽しみに待つことにしたい。ただ、特記すべきは、このような地下構造をもつところは、大地震の際に液状化現象が起りやすいということだ。1923 年関東地震でも、池や井戸から噴水のように水と砂が吹き上がったといわれる。立つ基盤を失った家屋、ことに2階屋や瓦葺きの家はことごとく倒壊した。現在もなお高級住宅地として知られる鶴沼松が岡一帯には、このような落とし穴があることも忘れてはならない。

川袋停留所 今からちょうど 100 年前、1902(明治 35)年に江之島電気鉄道(以下江ノ電と略す)が藤沢駅前と片瀬(現在の江ノ島駅)の間に開通した。当初の計画では、旧江之島街道に沿ったルートが考えられたが、当時 300 人もいたという人力車夫の猛反対運動により、現在のルートに変更されたという。鶴沼海岸別荘地にとっては、むしろこのことが幸いしたといえる。

藤沢を出た江ノ電は、すぐに石上停留所^{いしかみ}に着いた。この停留所は現在のどこにあったかは痕跡がない。現在の石上駅は高砂停留所^{たかさな}といった。そこから緩やかな坂を下りきったところで境川の堤防上に出た。そこにあった停留所が川袋である。先にも述べたように、この蛇行が現在の直線的な流路に付け変わったのは、1917(大正 6)年だから、江ノ電開通後の 15 年間は川袋と次の柳小路停留所の間は境川に沿って走っていたことになる。付け替え工事の後でも、1921(大正 10)年には 9 月と 10 月の 2 回の大暴風により、旧流路を氾濫水が突進し、江ノ電の土堤を破壊したという。この時には引地川の流路も付け変わっている。最近まで江ノ電には当時の鉄橋の痕跡が見られた。

1908(明治 41)年末、江ノ電は川袋に発電所を設置し、翌年にはここからの電力供給により、鶴沼に初めて電灯がともった。河川改修後の旧流路は、石上通り(旧江之島道)と江ノ電を結ぶルートともなり、新車両の搬入は川袋で行われていた時代もある。また、戦中・戦後の一時期、石上・柳小路を廃して、川袋に一本化していたこともあった。現在でも川袋停留所跡地は江ノ電の資材置き場となっている。

高瀬一族による開発 柳小路停留所と鶴沼停留所との間には藤ヶ谷^{ふじがや}という停留所があった。この東側、境川との間に 20,000 坪の敷地をもつ鶴沼御殿と呼ばれる大邸宅をかまえたのが、横浜で生糸貿易により財をなした高瀬三郎である。彼は 1 男 5 女をもうけたが、この男子が高瀬彌一^{やいち}だ。彌一は神奈川

中等学校(現横浜希望ヶ丘高校)、第一高等学校を経て東京帝国大学文学部に進んだ。保養地鵠沼の大邸宅に住んでいた彼の許には、多くの学友や知人が訪れた。彌一の長女笑子の記憶によれば、交友は阿部次郎・和辻哲郎・茅野蕭々・茅野雅子・与謝野晶子・矢代幸雄・林 達夫などというそうそうたる顔ぶれだった。学友たちの中には、5人の妹たちとも親しくなり、結婚にまで進むケースもあった。これはこれで実に興味深い話だが、本論の主旨から外れるので、先に進もう。

1916(大正 5)年、父高瀬三郎が胃癌で死去したためか、それまで藤沢中等学校(現藤嶺学園藤沢高校)の教壇に立っていた彼は実業界に身を転ずる。主な事業は鵠沼本村と鵠沼海岸別荘地の中間にあった無人地帯(傾斜地はモモ畑、平坦地には冬はコムギ、夏はサツマイモやスイカが栽培されていた)の定住の高級住宅地開発である。ここには将来、小田急が開通する予定もあった。叔父(高瀬三郎の末弟。彌一とは余り年齢差はなかった)にあたる山口寅之輔も、鵠沼海岸別荘地と川袋低湿地の間の砂丘に《松島苑住宅地》を開発した。こういうわけで、川袋低湿地をぐるりと取り巻く一帯は、高瀬一族によって開発されたといえるだろう。

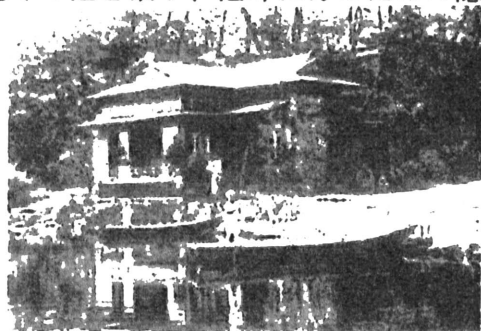
川袋高瀬邸 1920 年頃、彼は藤ヶ谷の邸宅を銀座の豪商、徳力に売却し、川袋に新たに 5000 坪の土地を購入した。場所は現在の橋通りが石上駅(当时は高砂停留所)から西へ向かう道とぶつかるあたりの南向き斜面一帯である。現在ここには信号機付きの十字路があるが、南に直進する下り坂は、当時は高瀬邸内になっていたため、丁字路だった。

彼は南向き斜面の上部に数寄屋造りのしゃれた和風邸宅を建てる。川袋の低湿地を距てて鵠沼海岸別荘地の松林、その彼方には相模湾と江の島を望み、涼風が吹き上げる素晴らしい眺めだっただろう。ところが建てて間もなく起こった 1923 年関東地震によって全壊の憂き目を見る。長女笑子が倒壊家屋の下敷きになって、救出は困難を極めたが、幸い命に別状はなかった。

震災後、敷地下部の低地に 3000 坪近くの池を掘り、池畔に母のための隠居所を建てた。[右⑨]近隣の A 家、K 家でも大きな池を掘ったり、砂丘を崩してゴルフ練習のための芝生をつくったりした。

どんな池だったのか、長女笑子の著『鵠沼断想』から引用してみよう。

「上の庭の一隅の池に水を通し、その水は細い流れを通して次の小さい池に入り、また小溝を迂回して流れ、滝と



⑨ 川袋高瀬邸 下の池と隠居所

なって下の大きい池に落ちるというような贅沢な林泉である。その滝を作るのに、早川や根府川から大きな石を牛車で運ばせたりした。東京の磯谷という庭師の棟梁が設計し、藤沢や鵠沼の土方や植木屋を使って作ったものである。下の池は三千坪近くあり、小さい島の間を舟で漕ぐことができた。島の一つには燈籠があって電気がつくようになっていた。」

「上の庭の一隅の池に水を通し」とある。この水はどうしたのだろうか。

震災後の復興期、彌一は二つの大きな事業を手がけている。その一つは藤沢駅南口と鵠沼海岸を結ぶ自動車道路(現在、〈こまわりくん〉という小型バスが走っているルート)の建設、もう一つが江之島水道(株)の創設である。

江の島には良質の飲料水はなく、島の人々は対岸の片瀬から重い水桶を舟に載せたり、長い不安定な棧橋を天秤棒で担ぐなどして運ぶのが日課になっていた。荒天の時には困難と危険が伴った。これを知った彌一は、自宅の庭に井戸を掘り、江の島までの水道管を敷設した。海底の水道管を通り、川袋の井戸水が江の島に届いたのは1926(大正15)年12月14日のことである。高瀬邸の池の水も、この井戸から得られたのではなかろうか。やがて井戸は1本では足りなくなり、2本目の井戸が江ノ電の東側に掘られた。1928(昭和3)年2月には江之島水道(株)は東京の玉川水道と提携、湘南水道(株)として事業を拡張した。1930(昭和5)年に刊行された『大藤澤復興市街図』には高瀬邸の所に〈湘南水道水源地〉と記載されている。しかし、当時は江の島への途中の鵠沼・片瀬地区は、自宅の良質な井戸水が得られたので、水道をわざわざ引こうという家は少なく、この事業は成功したとはいえなかった。1933(昭和8)年3月、湘南水道(株)は県営水道に移管されている。

このことは、川袋周辺の土地には売るほどの量と質をもった地下水があったということを証明している。川袋低湿地はこうした豊富な地下水によって涵養されていたのだ。

川袋低湿地の謎 ところで、先にも述べたように、1882(明治15)年測図の1:20,000 陸軍迅速図によると、川袋低湿地は北部が沼田、南部が水田記号(現在の地形図図式とは違うので注意)に区分されている。しかし、1887(明治20)年測図の1:20,000 地形図では全面沼田の記号に変わる。ところが1918(大正10)年測図の1:25,000 地形図では再び水田記号で覆われている。この当時の図式では、田は沼田・水田・乾田と区分されていて、堀川田は乾田である。沼田とは踏み込むとズブズブ潜る田で、田下駄や田舟が必需品だった。水田とは冬でも水を落とさない田、乾田とは冬には水を落とす田だ。この区分はこれら地形図が陸軍の手でつくられたことに由来する。現在はこれらの区分はせず、水田記号に統一している。

いずれにしても、どこにも池らしいものは見あたらないのである。もしか

したら蓮池はなかったのではないのだろうか。しかるに、高瀬笑子はその著『鵠沼断想』の中で沢地あるいは沼沢地と記している。これは大正期のことであるから、その時代のことをご存知の方も生きておられるに違いないのだが、筆者はお目にかかったことはない。



⑩1882測図1:20,000迅速図 1887測図1:20,000地形図 1918測図1:25,000地形図
80%縮小 80%縮小 鉄道補入 実寸大

はたして一面の水田だったのか、または単なる湿地だったのか、あるいは別の何かだったのか。ここにもう一つの大きい疑問点が残るのである。

一つの仮説として、こういうことを考えてみた。

水田記号という、普通は稲田を連想する。しかし、水田とは水を引き込んだ耕地のことであるから、そこで栽培される作物は必ずしもイネとは限らない。蓮根や蓮の実を生産するためにハスを栽培する蓮田、イ(蘭草=萱表の原料)を栽培する蘭田、ヨシ(葭簀の原料)を栽培する葭田、ヒシの実を採取するための菱田なども水田記号で表されるのだ。みごとに生えそろったヨシを見て、地図制作者が葭田だと判断すれば水田記号で表現するだろうし、ハスの場合も考えられる。こうなると、そこに池沼があっても有用植物に覆われていた場合、水田と見なされてしまう場合もあるのではなかろうか。

低湿地の埋め立て 大正から昭和初期、旧制一高の名物校長として知られた歌人杉 敏介は、現在の鵠沼橋に別荘を持っていて、高瀬彌一とも交流があった。あるとき彌一から沼沢地にシギ(鴨)が飛来することを聞いて次の歌を詠んだ。

高瀬彌一君より今も砥上の川袋に鴨あまた降り立つ由を聞きて、西行の跡なめりと思ひて
砥上原いまも鴨立つ澤をおきて

いづくに古き跡をたづねむ 南山歌集(昭和24年、亀井高孝編)

杉 敏介がこの歌を詠んだのは、1929(昭和4)年とされている。ところが、高木和男元会長の『鵠沼海岸百年の歴史』によると、「江の電の線路の西側の深い田は、この土地を所有した斉藤家(?)で、昭和2～3年頃、片瀬山か

らトラックを敷いて、江の電の線路の下をくぐって土を運んで、長い時間をかけて埋め立ててしまっ^ゑて、現在^ゑのようになった。」とある。なお、(?)で示される斉藤家については、甘粕家とも聞いたし、相沢家という説もある。いずれにせよ、片瀬の地主であったろう。

再び高瀬笑子著『鵠沼断想』から引用してみる。

「砥上ヶ原の沼沢地の埋め立てが始まった頃、その頃は鎌倉浄明寺に移っておられたのだが、測量師、写真師を連れて砥上ヶ原を歩いていらっしゃる先生(杉 敏介のこと)にお目にかかった。その後、論證を出されたと聞く。父はこの歌(先掲の歌)を彫らせて歌碑を建てたかったであろうが、昭和 7、8 年頃のこと^ゑで経済的にすでに行き詰まっていた。」

高木説では昭和 2 ～ 3 年頃、高瀬説では昭和 7、8 年頃のこと^ゑで、5 年ほどのずれがある。一般的には 1930(昭和 5)年前後ともいわれる。この事業がいつ誰によって行われたか、明確な記録は発見できていない。

もう一つ興味を引かれるのは、杉 敏介の行動である。測量師、写真師を連れて何をしていたのか。論證を出されたというのはどこが宛先か。謎は深まるばかりである。

現在、蓮池の南方にわずかに耕地が残っているが、中でも鳥よけのネットに護られたナス畑を耕作しているのは、清水集落の Y 家だ。Y 家はおそらく鵠沼地区で唯一の専業農家で、ここのナスは 2000 年度の県の品評会で最優秀賞を獲得した。埋め立て後の川袋低湿地の耕地は、片瀬の農家が主に耕作していたと思われるが、鵠沼との比率はどうだったのだろう。鵠沼本村から川袋低湿地通じる道は、明治 20 年測図^{うなよ}の地形図では大東辻から今の鵠沼中学南側を通るいわゆる〈綱縫り場〉を経て高松山砂丘を越え、低湿地の南側を抜けている。大正 10 年測図の地形図では、今の蓮池の脇から鵠沼女子高への道もできている。

7. 蓮池の変遷

遊水池川袋 もう一度高瀬笑子著『鵠沼断想』から引用しよう。

「昭和 13 年、片瀬川の堤防が切れて大水が出た時のことである。わが家は昭和 11 年に祖母と母が死に、使用人は常時置けなくなり小人数になったので、下の池畔の祖母の隠居所に移っていた。片瀬川の水はあふれて、昔なら川袋の沢地をいっぱい^ゑに満たすわけだったのだろうが、この沢地を埋め立ててしまったので、A、K、高瀬の池へどっと流れこんだ。(中略)池畔の家は半分ほど水に沈み、中に小学生の妹が二人、浮かび上がった畳にのり、鴨居につかまって助けを待っていた。」[→ 19 頁⑨]

これは 1938(昭和 13)年 9 月 1 日に 20 年振りの台風が関東に上陸し、豪雨

をもたらした時の話だ。これによって、川袋低湿地が埋め立て前は遊水池として機能していたことが判る。

蓮池は河跡湖(三日月湖)であるといわれる。筆者もこれまでそう書いてきた。しかし、厳密にいうならば、現在蓮池と呼ばれているものは、自然に形成された河跡湖とはいえない。いうならば、かつての河跡湖を埋め立てたときの埋め残された部分だ。それも都合によってかなり移動したり、戻されたりと、紆余曲折がありそうだ。

蓮池はいくつあったのだろうか。よく聞くのは7つあったという説である。これもどの時代かによって変わってくる。つい最近までは3つあった。〈第3蓮池〉と呼ばれていたものが埋められてしまったのは2000年のことである。この池は公道に接していなかったもので、比較的自然が保たれていた。



⑫ 1947(昭和22)年2月米占領軍撮影の航空写真

航空写真を読む 『鵠沼』83号で、伊藤会長が〈米軍撮影の航空写真について〉と題して報告している1947(昭和22)年2月撮影の航空写真[⑫]を読んでもみると、蓮池は現在の位置より東にずれていて、蛇行の痕跡が認められる。ところがその北側と東側にも小さな池があつて、水がたたえられている。かつての高瀬邸の下の池は、3000坪あつたほとんどは埋め立てられ、宅地整備がされているが、まだ家はそれほど建っていない。終戦直後のこととて、

畑になっていたであろう。池は若干残されているが、その中央に道路が通り、2 つに分断されている。注目すべきは、西方の砂丘の麓にかなり大きな養魚池と思しき池があることで、コンクリートらしい直線の枠で3 つに区切られている。この池は一時期釣り堀として利用されていたと聞く。

筆者が直接知るのは、1950 年代からの蓮池だが、この当時は現在のいわゆる第1 蓮池と第2 蓮池はつながって、かなり細長い池だった。河跡湖と思いきや、いこんだのはそのためである。ハスも生えていた。近くの方に「蓮根を収穫していたのですか？」と尋ねると、首を傾げながらも肯定的な返事が返ってきた。いつ頃まで、誰がということとは不明のままである。ちなみに現在のハスは、市の公園課の手で新たに植栽されたものだ。

1950 年代の川袋低湿地の南半分は、まだまだ田畑に覆われ、家は建っていなかった。東部に半島状に突き出た砂丘の上にかなり大きな洋館が建っていたように記憶する。コナン=ドイルにはまっていた中学生は、黄昏時にここを通る時、『パスカヴィル家の犬』に出てくる湿地を連想したりした。蓮池から聞こえるウシガエルの鳴き声が、不気味さを募らせた。

高圧電柱闘争 1951(昭和 26)年 6 月、県電気局が、鵠沼と片瀬にまたがる川袋低湿地に、住民に無断でコンクリート製高圧電柱を立てるという事件が起きた。藤沢駅構内の変電所から鎌倉に 22,000 ボルトの高圧電力を送電するルートの一部である。これに対し、地元住民から猛烈な反対運動が起きた。県への陳情請願や告発、地主関係者全員による訴訟など多彩な反対運動が展開され、県側は土地収用法をチラつかせるなど、争議は泥沼化していった。藤沢市議会ではこの問題に関する特別委員会が設置されたが、市当局の態度も消極的なため、議会で乱闘騒ぎが起きたりした。1955 年末に県収用委員会が、地元住民の主張を退けた採決を行い、反対運動は激化して、実力行使も辞せずとの態度をとったため、収用法の実行には至らなかった。1958(昭和 33)年 10 月 18 日、県側が折れてようやく妥協が成立した。

この問題は戦後住民運動高揚期の中でも特筆すべき事件であったことは『藤沢市史』が 1 項目を立てて採りあげていることでも判る。この粘り強い取り組みとその成果は、地元住民の団結を強め、やがておこる蓮池保護運動に受け継がれていく。

8. 蓮池を守れ

蓮池がなくなる！ 1960 年代、高度経済成長期を迎え、鵠沼の宅地化は急速に進んだ。かつての田園風景は〈スプロール現象〉と呼ばれる虫食い状の開発により、次々に姿を消していった。地盤が弱く、水害の危険性がある水田地帯が残されたが、それも 1960 年代末には大型開発の餌食となった。八

部の堀川田には鵠沼運動公園や《太陽の家》が、名だたる〈ドブツ田〉だった奥田の水田は、交通アクセスの便がよいこともあって、体育館・図書館そして市民会館などの公共施設をはじめ、大型店舗、高層マンションの建設が相次いだ。

しかし、この段階になっても川袋低湿地の蓮池と周辺の水田はどうか命脈を保っていた。ところが、産業構造の転換は、いつまでもそれを許さなかった。肝心の農家が次々と離農し、耕地を手放すことになったのである。〈米余り現象〉が起き、食管法によって保護され、米さえ作っていれば何とか営農できるという時代は終わった。かくして鵠沼で最も海拔高度の低い住宅地が生まれるに至った。そして、蓮池は分断され、心ない人たちが投げ込む粗大ゴミのたぐいが醜い姿をさらし、悪臭を放つ有様になってきた。

「このままでは蓮池が消えてしまう！」立ち上がった市民たちがいた。その活動経緯と結果については、《ハス池の自然を愛する会》の代表メンバーでもある桑原会員が次章で報告しているので、そちらに譲りたい。

9. 絶滅危惧種、蓮池のデンジソウとメダカ

デンジソウ 神奈川県立博物館(発表時は〈生命の星・地球博物館〉)が中心になって行われた県内の生物調査は、1995年3月末『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』として公刊された。その植物の部から引用してみる。

「湘南砂丘地帯の片瀬、鵠沼地域から絶滅した貴重植物は多い。この地域は昭和初期に小田急線の建設とそれに伴う開発によって砂丘列間の貧栄養で酸性度の高い低湿地の消失により食虫植物のミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、湿地植物のヒメナミキ、ヤナギヌカボ、ゴマクサ、ミズキカシグサ、イヌイが絶滅した。なお、シダ植物のデンジソウは1975(昭和50)年までは鵠沼女子高校の裏手の湿地に生えていたが、ここも埋め立てられて失われた。湘南海岸は終戦後の目覚ましい開発により自然海岸は狭められ、砂浜は著しく失われている。」

シダ類デンジソウ科のデンジソウ(学名:*Marsilea quadrifolia* L.)は、暖帯の水田や沼などの水中に生え、四つ葉のクローバーに似た葉を水面に突き出す夏緑の多年草である。和名は葉が漢字の〈田〉に似ているところから〈田字草〉ということで名付けられた。1969(昭和44)年に鵠沼藤が谷の蓮池でデンジソウの自生が発見され、湘南砂丘地帯唯一の自生地だということで話題になった。デンジソウそのものは元来さして珍奇な植物とはいえない。北海道(極稀)、本州、四国、九州、奄美大島に分布し、本県では、多摩、三浦、湘南、西湘南、小田原など低地部の各地域にかつては広く記録が見られたが、今日では秦野市や中井町の一部(稀)を残して、ほぼ消滅した。そして蓮池の

デングソウも 1975(昭和 50)年には失われたのである。

ところがドッコイ！ 蓮池のデングソウは生きながらえているのだ。

鶴沼在住の詩人、故十時延子は、蓮池の周辺が次第に宅地化し、蓮池が粗大ゴミの捨て場と化してきた 1970 年代、嫁 KW(当時市立六会小学校教諭)とともに蓮池から数株のデングソウを採取し、自宅の睡蓮鉢に植え付けた。その後、川名の森久谷戸の水田が宅地化することを聞きつけ、そこに自生するタコノアシという植物を、できたばかりの新林公園の水田跡に移植したこともある。これらの行動は、個人的な趣味で行ったものではなく、何人かの植物学者・生態学者の指導のもとになされたことをおことわりしておく。

幸い、睡蓮鉢のデングソウは順調に繁殖し、今日では県立フラワーセンター大船植物園、市立長久保公園みどり普及センター、湘南台小学校ビオトープ、(株)池上製作所湘南工場内の〈藤沢メダカの学校池上分校〉などに株分けされ、それぞれ大切に育てられている。

藤沢メダカ再発見 さて、先に紹介した『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』の魚類の部には、驚くべき事実が掲載された。北海道以外の日本中の水田や用水路で見られ、童謡にも歌われ、子どもにも親しまれているメダカ(学名:*Oryzias latipes*)が〈絶滅危惧種 F〉と位置づけられたのだ。自然界に野生の形で生き残っているのは県内では小田原市内の 1 か所のみであり、あとは数か所のものが細々と水槽内で飼育されているに過ぎないという。

学校教材としてのメダカは、教材業者・ペットショップなどから入手できるヒメダカがほとんどだ。これでは子どもたちに「メダカとは、オレンジ色の魚だ」という認識が定着してしまう。実験動物としてならヒメダカでも構わないが、教材としてはいかがなものか。このことに心を傷めた神奈川県立教育センターの W 室長は、県内の野生メダカの調査に乗り出した。一方、藤沢市内では、教育文化センターを拠点に、教員有志の〈生き物調査研究会〉が地元のメダカを追い続けていた。しかし、これら 3 つの調査でも藤沢市内の野生メダカは見つからず、絶滅したと判断せざるを得なかった。

相模原市大島に、県水産総合研究所が〈内水面試験場〉を設け、その初代所長に本鶴沼在住の S が着任した。内水面試験場は、アユに代表される経済魚類の繁殖法開発が主な業務だが、傍ら県内の稀少魚の保護にも力を入れている。S 場長は、幼い頃、近所の引地川沿いの水田でメダカを掬い、飼育した思い出を持っていた。「それが、水産養殖というライフワークに進む原点だった」と振り返る。「どこかに藤沢産の野生メダカを飼育している人がいるに違いない」S 場長は、暇を見つけては藤沢市内を訪ね歩いた。成果はなく、あきらめかけた頃、「鶴沼桜が岡の I 邸の池にたくさんメダカが泳いでいる」という噂が伝わってきた。早速訪ねてみると、おびたしいメダカ

たちが群れ泳ぐ池があった。訊くと 40 年近く前、ほど近い蓮池で掬ったメダカをそれまでコイを飼っていた池に放し、メダカ専用の池にしたのだという。メダカの置かれた現状を説明し、系統保護のために分けて欲しいと熱心に説く S の話に感動した所有者は、「そんな貴重なメダカなら、喜んで譲りましょう。是非増やして子どもたちにも見せて下さい。」と、申し出てくださった。

このようにして再発見された鵠沼の庭池で飼われてきた境川水系蓮池産のメダカは、まず神奈川県内のメダカを系統保存している内水面試験場と県立教育センター、そして市教育文化センターで大切に飼育・増殖されることとなった。

市教育文化センターの K 研修指導主事は、県立教育センターの W 室長の指導で、このメダカを精査した。メダカの水系別系統の特色が外見的に判別できる根拠の一つに、しりびれの軟条数が知られている。K は、預かったメダカのしりびれを丹念に数えてみた結果、平均 18.33 本で、周辺諸河川のメダカよりも若干多いことが判明した。それは、少なくとも他の河川のメダカとは違いがあることを意味する。

こうした経緯から、このメダカを他と区別するために《藤沢メダカ》と名付けることにした。後に東大理学部で DNA 鑑定をしていただき、裏付けをとった。

「是非増やして子どもたちにも見せて下さい。」との申し出に応えるためには、各学校にメダカを配布すればそれで済むというわけには行かない。S・W・K の 3 名は、メダカのスペシャリスト養成の組織づくりを相談し、その呼びかけ人として、理科担当指導主事の経験を持つ KW 天神小学校校長に白羽の矢を立てた。義母から受け継いだ蓮池のデンジソウを育てていた KW は、同じ蓮池出身のメダカがいたことに感動し、これを引き受ける。早速、藤沢市立の各学校に書簡を発送し、メダカのスペシャリストになるべき教員を募った。こうして誕生したのが《藤沢メダカの学校をつくる会》である。会長に KW、副会長に HM 湘南台小学校長を選任、事務局、運営委員などの組織化が話し合われた。また、S・W・K の 3 氏に加えて、内水面試験場で希少淡水魚の研究・増殖を担当している NS 主任研究員に会のアドバイザーを依頼し、快諾を得た。

1996 年 9 月に入ると、各会員所属校からメダカの配布が始まり、10 月末までに小学校 35 校、中学 11 校、養護 1 校の市立全校に配布を完了した。

会では、基本テーマを「藤沢メダカを飼育し見せる・増やす・学習に生かす・広げる」と定めた。その後、数回、各アドバイザーを招き、メダカの持つ教材としての価値、系統保存の重要性、飼育や繁殖の注意点などを学ぶと

共に、会の組織強化についての熱心な話し合いが行われた。

こうした会の活動は、各種メディアで紹介され、一般に周知される場所となった。それに伴って、一般市民の間から「私も藤沢メダカが飼ってみたい」「是非譲ってくれないか」という声と共に、会への打診が飛び込むようになってきた。これに応えるには、若干問題がある。

まず、系統保存の問題である。《藤沢メダカ》とわざわざ名付けたのは、このメダカが境川水系固有の遺伝子を持ち、他の水系のメダカとは区別して扱わなければならないと考えたからだ。メダカはうまく飼えば1シーズンで数十倍にも増やせる。増えすぎて邪魔になったメダカを他水系に放流されては困る。

次に、《藤沢メダカの学校をつくる会》は、学校教育で藤沢メダカをいかに活用するかを研究しようという教員のサークルなので、市民の方々への繁殖や配布は手に余る。

これらの問題点を解決するためには、専門家の指導による組織を作ること、大量繁殖が可能な施設が必要となる。この問題を一挙に解決したのが江の島水族館の存在だった。

1997年3月、会長とSアドバイザーは、江の島水族館にH館長を訪ね、快諾を得ると共に《藤沢メダカ》を寄託した。

5月にはH館長を会長とする《藤沢メダカの学校をつくる会のPTA》の発足に漕ぎつけた。これは、市民の手で藤沢メダカを飼育していただき、メダカの系統保護の大切さや「増やす・広げる」生涯学習活動をするとともに、増えすぎたメダカは学校へ教材用に還元していただくという、社会教育と学校教育との連携活動である。

一方、行政の窓口を藤沢市環境部みどり課が引き受けて下さり、日本大学生物資源科学部の協力も得られることとなった。こうして、単なる教員の学習サークルではなく、行政や研究機関や社会教育機関、そして一般市民や地元企業がリンクするという、全国的にも稀な組織の輪が広がって行く。

これ以降、《藤沢メダカの学校をつくる会》とPTAが行ってきた活動については、会のホームページ(<http://www2s.biglobe.ne.jp/~kurobe56/fms/fms.htm>)をご覧ください。地元《藤沢ケーブルテレビ(現 J-com 湘南)》は、45分の特集番組『藤沢メダカ物語』を制作・放映した(テープは市広報課で貸し出し)。今後、会では活動を取りまとめた書籍の発行も企画されている。

1999年2月18日、環境庁(当時)が、メダカをはじめ18種の淡水魚を[絶滅危惧Ⅱ類]に指定したことは、国民に大きな衝撃を与えた。これを機に、全国的なメダカ保護を中心とする環境問題のネットワークづくりが取り組まれ、『第1回全国めだかシンポジウム』が高知市で開かれて、藤沢の活動は

全国へ知られることとなった。第2回は2000年12月大阪で開かれ、これを機に《日本めだかトラスト協会》が発足、KW会長は理事に就任すると共に、『第3回全国めだかシンポジウム』の主管団体を依頼された。

全国からお客様をお招きするのに、どのような準備が必要か。会の働きかけに応じて、さまざまな支援があった。

藤沢橋通郵便局は、蓮池と藤沢メダカと江ノ電をデザインした風景印[右⑬]を制作・発表し、大会当日には記念押印台紙を販売し好評を得た。

鵜沼桜が岡のスワン洋菓子店はメダカをデザインした〈藤沢メダカサブレ〉を発売、しおりに蓮池とデンジソウ・藤沢メダカについて解説を記している。



鵜沼石上のブティック〈ばすてる〉では、藤沢メダカとデンジソウを刺繍したランチョンマットやコースターを発売した。

2002年3月23日、早くも満開になった桜に祝われ、全国各地からの500人を越す参加者を得て大会は盛大に開催された。翌日には〈藤沢メダカの学校池上分校〉、江の島水族館見学から小田原の県内唯一の生息地、〈小田原めだかの学校〉を巡るバスツアーも行われた(『鵜沼』84号に速報)。

10. 市民のビオトープに(これからの蓮池)

生態調査 1998年6月から、蓮池の生態系について多角的な調査が始められた。これには市教育文化センターが呼びかけ人になり、《ハス池の自然を愛する会》・《藤沢メダカの学校をつくる会》・県水産総合研究所内水面試験場・日本大学生物資源科学部吉原研究室・江の島水族館・藤沢市環境部みどり課が協力する形で継続しておこなわれている。鵜沼公民館の《鵜っ子めだかの学校》の子どもたちも参加し、社会教育の場にもなっている。日本大学生物資源科学部吉原研究室では、これとは別により学術的で綿密な調査がおこなわれ、毎年論文が発表されている。

1998年の調査では、アフリカツメガエルという実験動物でしか利用されないカエルがおびただしい数採集されて、調査員を驚かせた。在来種のモツゴ(地元ではクチボソという)も多かったが、熱帯魚のグッピーも見つかった。ところが翌1999年の調査では、アフリカツメガエルは1匹もいなかった。熱帯育ちのカエルは冬眠を知らなかったらしい。その代わり恐れていたことが現実となった。オオクチバス(ブラックバス)の幼魚が大量に捕獲されたのである。『ブラックバスがメダカを食う』(秋月岩魚著・宝島新書)という書物が論議を呼んだのはこの年のことである。そのせいかモツゴは急減していた。2000年の調査では、さしものブラックバスはなぜか見つからず、以前

からいたアメリカザリガニが大量繁殖していることが目立った。2001 年の調査では、やたらに大きなリュウキンが泳いでいてびっくりした。アメリカザリガニも相変わらず多かった。この年からカルガモの営巣が見られるようになる。2002 年の調査では、アメリカザリガニは減少し、ギンブナ・メダカ・ドジョウなど外来種が若干増加してきた。

これらの調査により判明してきたのは、蓮池が生き物のゴミ捨て場になっていること、生態系がクルクル変わっていて不安定なことである。

2000 年 7 月 6 日、《ハス池の自然を愛する会》が呼びかけ人になって、《鵠沼ハス池連絡会》という集いがもたれた。参集したのは、日本大学生物資源科学部吉原研究室の面々、県水産総合研究所内水面試験場の NS 主任研究員、地元自治会《桜小路睦会》代表、《ハス池の自然を愛する会》代表、《藤沢メダカの学校をつくる会》代表、藤沢市教育文化センターの K 研修主事、行政側から藤沢市公園課・みどり課という面々である。ここでは蓮池の生態系復活と藤沢メダカ放流の可能性などについての意見交換がなされた。

世は環境ブームである。やたらに〈エコ〇〇〉ということばが飛び交う。「環境にやさしい」などというキャッチフレーズがあちらでもこちらでも聞かれる。学校教育でも環境教育の重要性が叫ばれて久しい。

ところが、環境科学はまだまだ一般の認識からかなり遠い存在だ。そもそもエコロジーとは生態学を意味する。生態学は環境を総体的に捉え、そのバランスを重んじる学問だ。人間の側の趣味や都合であるものだけを大切にし、それを害するものを排除するようなことは、厳に慎まなければならない。できるだけ自然はありのままの姿で残し、なるべく手を加えない方がいい。

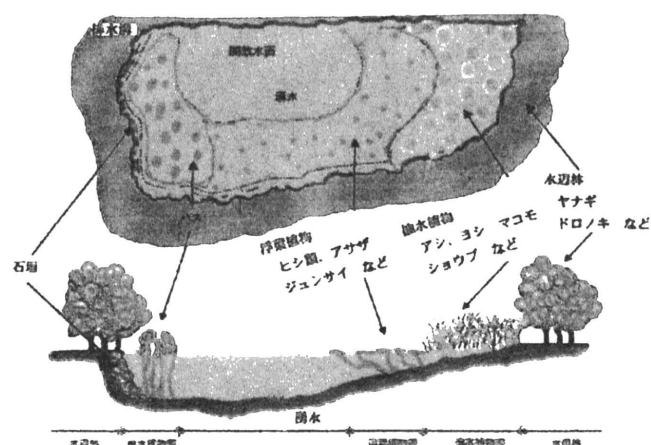


図 13 蓮池の環境整備計画案

⑭ 日大が提案する蓮池ビオトープ

しかし、なるべく人工的な手を加えることを控え、鵠沼本来の自然の姿が観

限られた空間の中でありのままの自然を再生させ、それを観察する〈ビオトープ〉なるものがドイツで提唱され、近年わが国の環境教育でも重視されるようになってきた。鵠沼に唯一残された〈沼〉である蓮池は、今日では余りにも人工的になりすぎてしまった。

察できるような、〈市民ビオトープ〉の場を確保したい。そのためには、餌付けすることが自然愛護と思っている人々への説得、花泥棒は許されると思っている人々への指導、飼育が手に余り、殺すのは可哀相だと捨てに来る人々への注意など、市民への啓発活動も必要となるだろう。

最後に『藤沢市環境基本条例』第2章 基本施策 第8条(市の基本施策)の(2)を掲げよう。

「野生生物の生息又は生育に配慮し、多様な生態系の確保を図るとともに、森林、農地、谷戸等の適正な保全及び地域に応じた自然植生による緑化の推進を図り、人と自然との豊かな触れ合いの場を確保すること。」

おわりに

と、ここまで、自らの浅学非才をも省みず、うだうだ書き連ねてきてしまった。もとより筆者は特段の専門といえるようなものはなく、ただ高校の社会科教員として、主に地理を担当してきた。高校の教員というものは、各専門家が調査・研究した成果を情報として受け取り、それを処理し、生徒の能力に合わせて提示し、生徒が更に自ら情報処理して理解できるようにする。いわば情報処理の橋渡し役を担っているという側面がある。

小論もそうした手法の結果であり、それぞれの専門家から見れば噴飯ものの独りよがりがあったり、誤解があったりするのではないかと恐れている。

さて、鈴木編集長から「85号は蓮池特集としたい。渡部さん、書いて貰えますか。」といわれ、「お引き受けしましょう。」と答えては見たものの、これを機会に調べようと思ったことのほとんどが調べきれなかった。実は、その部分が最も書きたかったのだ。今後更に調査を進めて、いつの日にかまとめようと思っている。あえて(序説)とした所以である。

以下、本文にも記しておいた疑問点を列挙しておく。

■現在の鵠沼・片瀬の境界線の変更時点はいつだったのか。また、なぜ明治期の流路が境界線となったのか。

■埋め立て以前の川袋低湿地は、一面の水田だったのか、または単なる湿地だったのか、あるいは別の何かだったのか。

■1930年前後といわれる川袋低湿地の埋め立ては、正確にはいつ誰によって行われたのか。どのような規模だったのか。

■杉 敏介は、測量師、写真師を連れてどういう目的で何をしていたのか。論證を出したというのはどこが宛先か。

■埋め立てによってできた耕地には、片瀬・鵠沼いずれの農家が耕作していたのだろう。

■蓮池のハスは蓮根生産の目的で栽培されていたのか。

以上の諸点についてご存知の方がおられたら、是非ご教示賜りたい。

書ききれないほどの多くの方々に、陰に陽にお世話になった。深く感謝申し上げる次第である。

まさに脱稿しようとする時に、蓮池でカワセミを見かけたという情報が飛び込んできた。餌が増えたということだろう。

【参考・引用文献】

香川幹一(代表)	神奈川県地理	日本地理集成IV	光文館	1964
小林政夫	藤沢の地質・見学案内①	わが住む里 27号	藤沢市図書館	1975
藤沢市史編纂委員会	藤沢市史 第一巻～第七巻		藤沢市	1975 - 1985
有賀密夫	鵠沼の歴史地理考	わが住む里 28号	藤沢市図書館	1976
小林政夫	藤沢の地質・見学案内②	わが住む里 28号	藤沢市図書館	1976
高木和男	鵠沼海岸百年の歴史―追補補正版―		菜根出版	1981
藤沢文庫刊行会	藤沢史跡めぐり	藤沢文庫 9	名著出版	1985
鵠沼を語る会	市内北部寺社見学資料	鵠沼 31号	鵠沼を語る会	1986
県高校社会科地理部会	かながわの川(上)		かなしん出版	1989
立石友男	海岸砂丘の変貌		大明堂	1989
県環境部環境管理課	神奈川県アボイドマップ 湘南版		神奈川県	1990
高木勇夫(編著)	藤沢市 地図に刻まれた歴史と景観 1		新人物往来社	1992
海津正倫	沖積低地の古環境学		古今書院	1994
生命の星・地球博物館	神奈川県レッドデータ生物調査報告書		神奈川県	1995
県高校社会科地理部会	新・神奈川県地理		県高校社会科地理部会	1996
久米 準	境川を歩こう	230クラブ新聞社		1996
小池一之／太田陽子	変化する日本の海岸―最終氷期から現在まで		古今書院	1996
有賀密夫	わが住む里 有賀密夫遺稿集		有賀郁子	1996
高瀬笑子	鵠沼断想		武蔵野書房	1998
上本進二／浅野哲哉	藤沢低地の地形発達と遺跡形成	東国歴史考古学研究所		1998
生命の星・地球博物館	岩石・鉱物・地層	かながわの自然図鑑①	有隣堂	2000
吉原喜好／松本将史	蓮池環境調査報告書	日本大学生物資源科学部		2000
村岡義章	湘南散歩 境川・引地川		武田出版	2000
教育文化センター	水のしらべ	藤沢の自然 3	教育文化センター	2001
渡部かほり(編)	鵠沼の自然	藤沢の自然 26	藤沢市	2001
内藤喜嗣	鵠沼海岸開発史の概略		内藤喜嗣	2001
藤沢の自然編集委員会	ふじさわの大地	藤沢の自然 4	教育文化センター	2002
有働恵子／武宮 聡	海岸砂丘の長期的な地形変動特性とその再現		筑波大学	2002
岩松鷹司	メダカと日本人		青弓社	2002

Ⅱ. はす池自然公園

——みんなで守ったはす池の自然——

桑原 玲子（会員・ハス池の自然を愛する会会員）

そのむかし鵠沼は、いたるところ松林で、その中に沼が……という風景でした。日々そのような姿が変わっていく中で、自然の姿が残ったところがはす池でした。

しかしその頃のはす池は、ふとんからバイクまで捨てられ、ゴミ池でした。そんなところでも春ともなれば子どもたちは、おたま、くちぼそ、めだか、ザリガニとおいかけて、池はちびっ子でいっぱいになりました。

その頃の子どもたち、とくに男の子は、学校から帰るとまずはす池に通っていました。夕方ドロドロで帰る子どもの始末に母親はため息をついたものですが、ちびっ子たちには、バケツの中のザリガニ……は宝ものでした。

「男の子は、はす池で育つみたいなのですね」といったものでした。

——“ハス池の自然を愛する会”発足—— 1974 年

「子どもたちに自然を残そう」と有志があつまり、ハス池の自然を愛する会ができたのは 1974 年でした。池のそばで住んでおられて、書道教室をひらいていらした長谷川宅に集まり、いまは故人となりましたが、長谷川晴三氏に初代の会長をおねがいして発足しました。まず取り組んだのが当時私有地であったはす池を市で買い取って公園として整備してほしい、という署名でした。これは短期間のうちに約 5000 の署名があつまり、市議会に請願しまして、採択されました。

そして毎月掃除をはじめました。会で一番はじめに買ったのは、プラスチックのボートと、ゴムのツナギだったのです。会の男性が胸までくるツナギを着て池に入り、ゴミをボートに拾い集めたのです。今では掃除の日を周辺の町内会にお知らせすると、大勢参加していただきます。

——市議会に出した請願—— 1975 年

通称「ハス池」の整備並びに自然公園設置に関する請願

おたまじゃくし、ざりがに、くちぼそ、はてはふなやこいまで釣れるハス池は、四季を通じて子どもたちの良い遊び場であり、鵠沼の地名を

自然の中にとどめている数少い場所です。日曜日には、バケツをさげた父子連れの姿や、たくさん子どもたちにまじって、真剣なまなざしの大人の太公望も少なからずみられます。ここ数年鷺の姿もみられるようになりました。またこの沼周辺には田字草をはじめとしてこの辺ではもうみられなくなってしまった貴重な野草も群生しています。このような自然環境は、私どもの生活にうるおいを与えてくれるかけがえのないものです。

しかし残念なことに、このハス池もこのまま放置しておけば失われてしまう状況にあります。もし失われてしまったら二度と再びとり戻すことはできないでしょう。

私たちは、「ここに沼があつてざりがにがたくさんとれたのよ」という昔話としてではなく、実際にざりがにのとれる「ハス池」を子どもたちに残してやりたいと切望いたしますし、また、そうすることが大人の責任であると思います。

なお、これまで、子どもたちのためにハス池を開放してくださっていた地主の皆様には深く感謝いたしますとともに、今後も御支援を切に願います次第です。

そこで、私どもは次の要請をいたします。

1. 現在公園予定地とされている部分を若干、変更、拡張し、ハス池の自然の姿をそのまま生かした自然公園を一日も早くつくってください。

なお、当面、買収（公園化）が困難でしたら「みどりの広場」に指定するなど現状保有のために必要な対策を早急に講じてください。またこの附近に災害時の避難場所がないことを考慮して一時避難場所として利用できるようにしてください。

以　上

付　記

不法投棄されたごみの処理、看板の設置など環境の整備は市当局の努力もあつて進んでおり感謝しております。

しかし一部ですがその後埋立てが進んでおり、このままではとりかえしのつかない状況になります。私どもも協力いたしますので、公園化の実施計画を早期に確定し、地主さんとの交渉を急ぐように重ねてお願いします。

——請願を審議し採択する—— 1975 年

「桜小路公園として計画決定しているが、池が希少価値として、どの位に位置づけられるかであり、現在の計画で買収し、池を整備し、その中で自然が保たれるように考えたい」「経費のかからない方法もあると思われるが、地形的なものもあり、立派な池になるよう考えている」「水田のくぼ地であったところでもあり、都市化が進むことにより、池がなくなること考えられる。希少価値の点からも地下水の調査など十分に研究したい」「公園は安全を第一に考えている」との答弁があり、「地元の要望にこたえてやるべきであり、長期計画に載せて実施することとし、水の事故対策等については危険個所に柵等をして、自然を残す形で整備されたい」「ゴミ投棄の問題もあり、生活環境を守る立場からも早期に公園の整備を促進されたい」等の討論の後、全員異議なく採択と決定しました。

——地下流動水あり、水質良好—— 1976 年

池中心の公園をつくるにあたって、ボーリング調査がおこなわれました。地下流動水あり、水質良好という結果でした。それでも、池の水が干上がった年が何回かあって、近所の方や会員が息絶えだえのサカナたちをすくっては、水のある個所に移す作業をしました。さいわいここ 2、3 年は水が涸れることがないので「水の道が変わったのかも」と会合のときしばしば話題になります。

——公園びらき—— 1987 年 3 月 21 日

春よこい♪早くこい♪歩きはじめたミヨちゃんが——と、ちびっ子とおとなで 600 人の大合唱で“はす池自然公園びらき”をしました。

池と周囲の土地の買収がすみ、第一段階の整備がととのったのです。甘酒・おしるこや、ヨーヨーつりなどで池のまわりには一足早く春が来たようでした。テントを張った招待席には各派の市議さんもみえました。

——「むかしどおりに、ハスの花を咲かせたい」——

「子どもの頃、朝起きると、はす池のハスの花がみえたのよ」と N 子さん。はす池のハスの花をおぼえている人がだいぶいて、「ハスを咲かせよう!」と。まず鎌倉の美術館の池で、かりとる時に根をあげようということで池に入れましたが、ダメでした。その後、小田原城址公園からもお声がかかり、頂きましたが、やっぱりダメでした。芽をザリガニがたべてしまうのだという説でした。その後、公園課が依頼した本職の造園業の方により関西

のほうからの「まことばす」が植えつけられ、根づいて開花しました。1992年、名前どおりのはす池となりました。

まわりの方々にも愛されて、はす池はいつもきれいです。こんもりしたみどりの木立の中は真夏でもひんやりと天然のクーラーのこちよさです。

ある時、「ほんとうに、こんな自然がよく残ったねえ。みんなの運動がなかったら、もうとっくに埋め立てられて、ビッシリと住宅が建てられていたよ。これはこの町の財産だなあ」と散歩のご年輩の方から声をかけられました。

——ある日突然ブルドーザーが—— 1998 年

こんなにみんなが愛しているはす池に、突然ブルドーザーが入り、「鵜沼女子高グラウンド」の看板が立てられました。ハス池の自然を愛する会は急遽会合をひらき、まず女子高に、ことのあらましをたずねにまいりました。そしてわかったことは

①鵜沼女子高は、在学生数に対して学校用地が基準の半分ほどしかなく、とにかく用地が必要なので、当面は買いとった用地に建物を建てるつもりはない。

②はす池公園は住民運動でつくられ、みんなが大切にしているところだということとは充分知っていたということ。だから市の公園課と相談して、学校が使わない時には、市民は自由に使えるという看板を出したのだ。ということでした。

——市の公園課長とも会いました——

課長と会ってわかったことは、はす池は木の橋がかかっている池のほうはおおかた市有地になっていますが、女子高側の広場はまだ市が何人かの地主から借地しているのです。その中の一地主が、以前に市と道路のことで気に入らないことがあり、「市に貸したくないが、今迄どおり市民が使うことはかまわない」といって、市とは借地契約ができていないところがあったのです。そこが売られたわけです。それでは仕方がなかったで、公園課長としてすまされるのでしょうか。

市議会の委員会の記録をみると、このことがおきる2年前の1986年にはす池の件で質問した議員に「公園の借地の部分の買収をすすめて二つの池を中心にした公園化をすすめる方針である」と明言する課長の発言がのっていました。なのになぜ？ の私たちの抗議に、現課長は“借地していないところだから、売られても仕方がない”と考えていた様子でした。重ねて抗議す

ると「この公園の成り立ちの認識が浅かった。」と今後のはす池公園の維持、保存への協力を示しました。

——信じて待っていたのが馬鹿だったのかしら——

市議会で請願が採択されているのだから、市はちやくちやくとその方針ですすんでいくと思っていたら、それはおお間違いだと気づいたわけです。

絶えず市の担当部署に働きかけ、そして市民の声として絶えず会は発信をしてしていなければならないのだと会員一同身にしみて感じました。

というわけで、はす池ニュース9号を発行しました。

——はす池ニュースに寄せられた小学生の手紙—— 1999 年

中山滋斗君

ぼくは、片瀬山にすんでいます。そのぼくの家がちかくに、「りゅうと」という友だちがいます。その人と、よくハス池に行つてあそびます。だけど、サッカーの試合でみんなを車にのせておくつているとき、友だちが「ねー滋斗、ハス池がなくなるって知ってる？」って言いました。そしてぼくが「えっ、うそだ、やだ、ぜったいにやだ」と思いました。そして次の日、りゅうとのお母さんが、「明日、署名を書いてもらいに行かない？」と言って「なんで？」ときいたら「ハス池がなくならないようにするためだよ」と言われて「よーしやるぞ!」ということになりました。

酒匂龍渡君

ぼくは、ハス池がだいすき

です。いつも片瀬山からハス池に行つてあそんでいます。なのに、とつぜんハス池に行つてみると、ザリガニやカメをつつていたハス池がグランドになっていました。

だからぼくは署名をはじめました。この前の1月15日の成人式では、100人に署名してもらいました。それですこし「ほっと」しました。

ぼくは、もっともっと署名をしてザリガニやカメをつつていたハス池を、とりもどきたいし、ほかの生ものも見ていたいの、ハス池の自然をのこしておきたいです。

桑原友作君

ハス池はぼくたちの大好きな遊び場所だ。ハス池でいろんなことをしてあそぶけど、やっぱり一番たのしいのはつりです。だけどもいまは、はり

をつけたつりはしてはいけなくなったので、できないからつまらない。

それに今は寒いから、あまりいかないけど、あったかくなったら、糸にイカをつけてザリガニなんかをつるのはできるからやるとおもう。クラスにはハス池の大きな子がいて、Aくんというんだけど、Aくんは、ハス池のそばにすんでいるんだ。

ぼくのおじいちゃんが市会ぎいんをしている時に、みんな、きたなかったハス池を、きれいにして、藤沢市の公園にしたんだと、前にきいたことがあるけど、ぼくの父さんも、虫かごにイカを入れて、クチボソを取るのがうまかったというから、ずっとむかしから、このへんの子どもは、ハス池であそんだんだと思う。

——はす池のいま——

「ハスが咲きだしたわね」
と近所の方たちの挨拶に花の様子が出るころになると、朝のみなさんの散歩の時間が早くなり、カメラの三脚が立てられ、絵筆をもつ人もチラホラと。今年は、ミニコミ各紙ではす池が紹介されました。またすばらしい写真とデラックスな編集で有名な“湘南通信”にも写真が何点も入ったはす池の特集が組まれまして、にぎやかにはす池の花どきを終わりました。



カルガモは2年つづけてはす池でたまごを生み育て、今年は最初8羽生まれたのですが、成鳥になったのは5羽でした。今ははす池を離れ、近隣の川などで餌をとって生きているようですが、時たま、2.30羽つれだってはす池に来ることもあるようです。

ハス池の自然を愛する会は、毎月最後の日曜の夜、6時半より藤が谷市民の家で例会をひらいています。

——はす池当面の課題は——

①ハシとドーロの問題

池にそった木の橋のかけかえ、また補修を、とねがっていますが、なかなか実現しません。橋を池の方によせて道をひろげることを受け入れればすぐ橋を新しくするとかの情報もありますが、「公園の中の道を車がビュンビュン通ってどうなるの」と会員一同は適当でないと考えています。

②女子高に買われてしまって虫くいになってしまった池にもハスを移して、はす池として残して、いまま借地しているところを一日も早く市が買い入れて、よい環境がしっかり残るように、明るくはす池を愛して残すウンドウをすすめていこうと話合っています。

メダカはじめ、はす池にすんでいるサカナたちの水濁れ対策に公園課がポンプを設置するプランがすすんでいます。

橘通りの今昔

梶倉 健【会員】

はじめに

橘通りとは、ＪＲ藤沢駅南口から高瀬通り（鵠沼新道）に至る幅５ｍ延長の約７００ｍの一般道で、一丁目から七丁目までであった。開設以来その規模は変わっていない。

筆者が、藤沢に移り住んだのは大正１４年、小学校１年のときで、場所は三丁目の駅から２００ｍ足らずの所である。辺り一面は麦畑で、目に入る人家は数軒に過ぎなかった。以来８０年近くが経ち、沿道の所帯数は１，０００戸を越えるに至っている。

橘通りの開設の経緯、変遷をそのバックグラウンド、人びととの係わり合いを通して辿ってみた。

橘通りの開設者である高瀬彌一については、藤沢市総合市民図書館発行の「わが住む里」に連載された高瀬笑子さんの「鵠沼断想」を参考とした。

（敬称一部略）

１．橘通りのできるまで

『皇国地誌』によれば、明治９年１月現在の鵠沼村は、戸数２９７戸、人口９２５人である。「鵠沼」８４号『鵠沼むかし語り』の中で関根佐一郎さんは「このうち本村には２００～２５０戸くらいが住んだろう」と

発言されている。とすると残りの５０～１００戸が引地、新田、花立、

東花立、石上いしがみに分かれ住んだことになるが、橘町が所在する東花立は無住であったと思われる。

明治１５年の陸地測量局作成の地図によれば、花立の辺りは松林の丘で集落は見られない。花立の南部は、海岸に至るまで湿地、松原、砂丘で

辺り一帯は、中世の砥上とがみヶ原の姿を色濃く残したものであった。

明治20年、東海道線が国府津まで開通し藤沢駅が開業すると、鵠沼海岸に光が当たり始める。同20年代には御用邸設置が話題となり、海岸周辺の土地へ投資が始まる。

御用邸話が消えると、避暑地、海水浴場として喧伝され、同25年、東屋^{あずまや}が開業すると、文人たちが好んで利用する。また明治35年には江ノ電が開通するなど海岸周辺は脚光を浴びるようになった。しかし海岸を離れた内奥に入れば、依然として無住の荒地のままであった。

2. 橋通りの開設

(1) 高瀬彌一の宅地開発

大正8年6月24日付けの横浜貿易新報に「汽車会」の大会を兼ねた懇親会が、藤沢駅南の藤沢実科女学校の校庭で開催されたという記事が載っている。汽車会とは、東京、横浜に汽車で通い仕事をする人士(当時は限られたエリートであった)の親睦団体である。この記事に見られるような人たちは、大正の始めころから増えており、また関東大震災の前後から湘南に住まいを求める動きも出てきた。

ここに高瀬彌一が登場する。彼は、貿易商として財を成した高瀬三郎の長男である。明敏な彼は、このような世間の動向を見て、これらの人々に定住の地を提供しようと考え、その対象として川袋の地を選んだのである。

こうして父の遺した藤ヶ谷の20,000坪の敷地と豪邸を処分し、川袋に20,000坪の土地を買い付け、自ら住むとともに大正10年ころから宅地を造成、区画、分譲を始めた。彌一は自分の体験を踏まえ、常々「ここは海岸地帯と異なり、海風の塩分、湿気は途中の松林に漉しとられてさわやかだし、砂地で水はけがよく明るい。また駅にも近い」といっており、住宅地として格好の地であると確信していたようだ。

彌一の考えに共鳴した政財界人、軍港の横須賀に通う幹部級の海軍軍人などが川袋に移り住んだ。前述したように鵠沼海岸地帯は、別荘地、海水浴場として利用されたが、海岸を離れた川袋地区は、人も住まず、わずかにある農地も本村から遠く不便と、いわば見捨てられた地域である。このような無住の荒地に、中流の上クラスの人々の住宅地帯が生ま

れたわけで、彌一は鵠沼の草分け、パイオニアといえるだろう。

娘の笑子さんは、父を評して「ずば抜けた頭脳の持ち主で、そのアイデアは常に人の先を行く……」としている。従来の鵠沼の開発が、別荘地、避暑地といった夏場限りのものであったのに対し、今まで省みられることもなかった内奥の川袋地帯を、定住の地として活用する彌一の構想は、鵠沼の将来を見通した卓見といえよう。

（２）橋通りの造成

宅地開発を進めるためには道路は不可欠であり、彌一は、片瀬街道(旧)の石上を基点として西に直角に伸び、江ノ電の線路を石上駅の南で渡る延長450mの道路を造成し、高瀬通りと名付けた。

次いで藤沢駅から鵠沼海岸に通じる約3kmの幹線道路を計画し、その実現に取り組んだ。

この道路は、ほとんどが砂山と松原の鵠沼東部の将来の開発を視野に入れたものだ。町当局が及びもつかないこの計画を、一私人の彌一が私財を投げうって始めたもので、開拓者彌一の真骨頂を示すものだ。

まず手始めが橋通りである。明治15年の陸地測量局の地図を見ると点線路(一人が歩ける程度の細道)が藤沢駅の予定地から本村に向かっていている。彌一はこの道を2.5間(約5m)に拡幅しようとした。沿道の農民はいずれも小規模で、彌一が「道路ができれば、両側は宅地になり高く売れる」と説得しても「広くもない畑が狭くなると」反対が根強く、結局道路用地は、私費を投じて買い上げなければならなかった。彼としては、さらに2間広げて4.5間(約9m)とし、歩道も付けたかったが、これを進めると賛成者まで敵に回すことになりかねず断念したという。

彼の考えを了解し、土地を提供してくれた人に酬いるために、通りの名称に地主の名を冠し上郎通り、高松通り、熊倉通り等としたが、橋通りだけは古い地名の花立をもじって橋通りとした。

私費で買い上げた道路用地は、理由は不明だが町への上地が認められず、長い間税金を払い続けなければならなかった。

大正15年、道路の造成が一段落すると、彌一は、水道事業に乗り出

し苦闘の末、後の県営水道の原型を作った。しかし道路も水道も支出ばかり多く収入が伴わない。折から昭和初年の大不況が吹き荒び、資金の調達源である土地の売却が進まず、銀行借入に頼ることになる。こうして税金と金利の支払いで借金は雪達磨式に膨れ上がる。昭和8年ころは、家財道具はすべて差し押さえられ、仏壇まで持ってゆかれるという悲惨な状態に追い込まれた。

昭和12年ころ、彌一の鵠沼開発に尽くした功勞に対し顕彰の碑を造ろうという話が、大学教授などの有識者、地元の有志たちの間で起きた。彌一はこれに対し「華々しいときでも面映いのに、自分で造った水道の料金が払えず給水を差し止められている始末だ。そんなことをされたら、苦勞して造った道路も歩けなくなる」と固辞し、顕彰碑は実現しなかった。

橋通り七丁目の魚林と郵便局の前の三角地に、大きな石が戦前、戦後の長い間転がっていた。この石は、顕彰碑の台座になるはずであったといわれたが、いつの間にか姿を消してしまった。

3. 橋通りの発展

(1) 大正末期から昭和初期まで

関東大震災後に京浜地区から藤沢に移り住む人が増えてきた。この傾向は、大正14年、国鉄の東京、国府津間の電化が完成し、また昭和4年、小田急江ノ島線の開通などにより拍車が掛けられた

同13年、筆者の家も高田の馬場から石上日の出町に引き越して来た。橋通り三丁目に移り住んだのは翌14年である。大正末期から昭和初期に掛けての橋通り界限の様子を思い出してみる。

当時の状況

国鉄藤沢駅の南口を出たところから橋通りが始まる。駅から少し離れて江ノ電の駅舎があり、その先から南に低い松林の丘が延びている。丘の上には教会があり、江ノ電は丘の西の裾を走っている。片瀬街道は東の裾を通っていた。目を西に転じると、松林を背にした藤沢実科女学校がある。その前を南に過ぎると、取り壊された工場の跡があった。残っているのは煉瓦の腰壁くらいであったが、かなり広く「カタン工場」といい、子供の遊び場になっていた。「カタン」はコットンで綿糸関係の工場かと想像していたが、寺田良夫会員の話で、そこには片倉製糸の工場が

あり、その工場が、辻堂の現在関東特殊製鋼となっている場所に移転した跡と分かる。

橘通りの両側は、ほとんど畑で「カタン工場」から三丁目にある平屋の我が家がよく見通せた。我が家から江ノ電の線路まで直距離で120m、関野雑貨店があるだけで、チンチン電車がガタコン、ガタコンと車体を揺らせながらのんびり走っているのが、畑越しによく見えたし、音も聞こえた。

五丁目の角を東に曲がり江ノ電と交差するところが、昔の石上停留場である。バスと同じでプラットホームはなくて、手を挙げれば止まってくれる。石上停留場は後に廃止され、当時の高砂(たかすな)停留場が石上駅と改名し、現在に至っている。

五丁目の角で魚忠の隣に白壁の可愛い洋館があった。この洋館はひどく老朽しながらも最近まで残っていた。

魚忠の隣は笹屋で古くから鶏肉を商い、主人は端正な容貌であった。六丁目に火の見やぐらがあったが、取り壊され町内会館が建てられた。寺田会員の話によると、敷地は高瀬彌一の寄付したものだそうだ。

現存する古い住宅では六丁目の後藤医院がある。昭和の初めに建てられ、木造、銅葺き屋根の当時としては変わった造りだ

五丁目に住まいがあったころ、近くに映画俳優の桑野通子、佐分利信、評論家の室伏高信の家族が住んでいた。映画俳優といえば、堺駿二が我が家の隣に終戦後しばらく住んでいた。映画人らしくない風貌、態度で俳優と聞いて驚いたことを覚えている。

昭和5年の「大藤沢復興市街図」に出ている橘通りの家並みは、筆者が大正末年に見たものと大きな変化はない。これは昭和初期の深刻な不景気に由来するものと思われる。

しかし、同5年に小田急江ノ島線の開通、同6年5月に東京鉄道局の「海の家」が鵠沼海岸に開業し、海の家行きバス路線が開設されるなど明るいニュースが出てくる。

(2) 昭和10年ころから終戦まで

昭和6年に起きた満州事変を契機として軍需産業が盛んになり、景気は立ち直りに転じる。鵠沼においても小松製作所、日本精工の進出、ま

た東京螺子の設備の大拡張などがあり、橘通りも潤ってくる。

橘通りの一丁目から五丁目までは、昭和11年ころまでに道路に面した両側は家が隙間なく立ち並び、以後は両側の奥に広がっていった。終戦後間もないころに米軍の撮影した航空写真を見ても、五丁目あたりまでの橘町は、ほぼ現在に近い家並みとなっている。

藤沢町の人口は増加し昭和15年には32,000人を超え、市制を施行する。橘通りに住む人が増えるにつれて商店が進出する。高瀬通り界限に住む「鵠沼族」（「鵠沼断想」に出ている「中流の上」クラス）を相手にする「御用聞き」商売が主流である。顧客とは信頼、人情で結ばれ、大根一本でも配達する。高瀬笑子さんは、味気ないデパート商法と比べて、当時の人情濃やかな商店街を懐かしんでいる。

戦前に出店し現在も残っているのは、一丁目の小塚屋酒店、飯田屋青果店、四丁目の山村米店、五丁目の金寿司くらいで、いずれも二代目となっている。七丁目の魚林は、つい最近まで商売していたが店は氷屋に替った。

（3）戦 後

昭和24年、商店街に「橘通り親和会」が発足した。同商店会は、藤沢駅周辺では最も歴史が古く、商店街の発展に活発に取り組んだ。

同27年には秩父の宮が現在の桜が岡1丁目に移り住み、逝去されるまでの一年間を過ごされた。その年に橘通りの舗装工事が、駅北口の銀座通りとともに完成する。この舗装は、他の商店会に先駆けて実現したものだ。

同35年には藤沢駅南部区画整理事業が着手された。この事業は、江ノ電線路東側の松山ほかを削平して奥田を埋め立てるなど工事期間も20年余にわたる大規模なものであった。

同39年のオリンピックに際し、江の島でヨットレースが開催されるのに備えて、南部下水処理場が整備され早期にトイレの水洗化が完了した。

駅南部区画整理事業には、川名から藤沢警察署に通じる鵠沼奥田線（幅18m）の造成が盛り込まれている。しかし工事は、片瀬街道から橘通りに至るまでの450mが昭和40年ころに完成しただけでストップし、

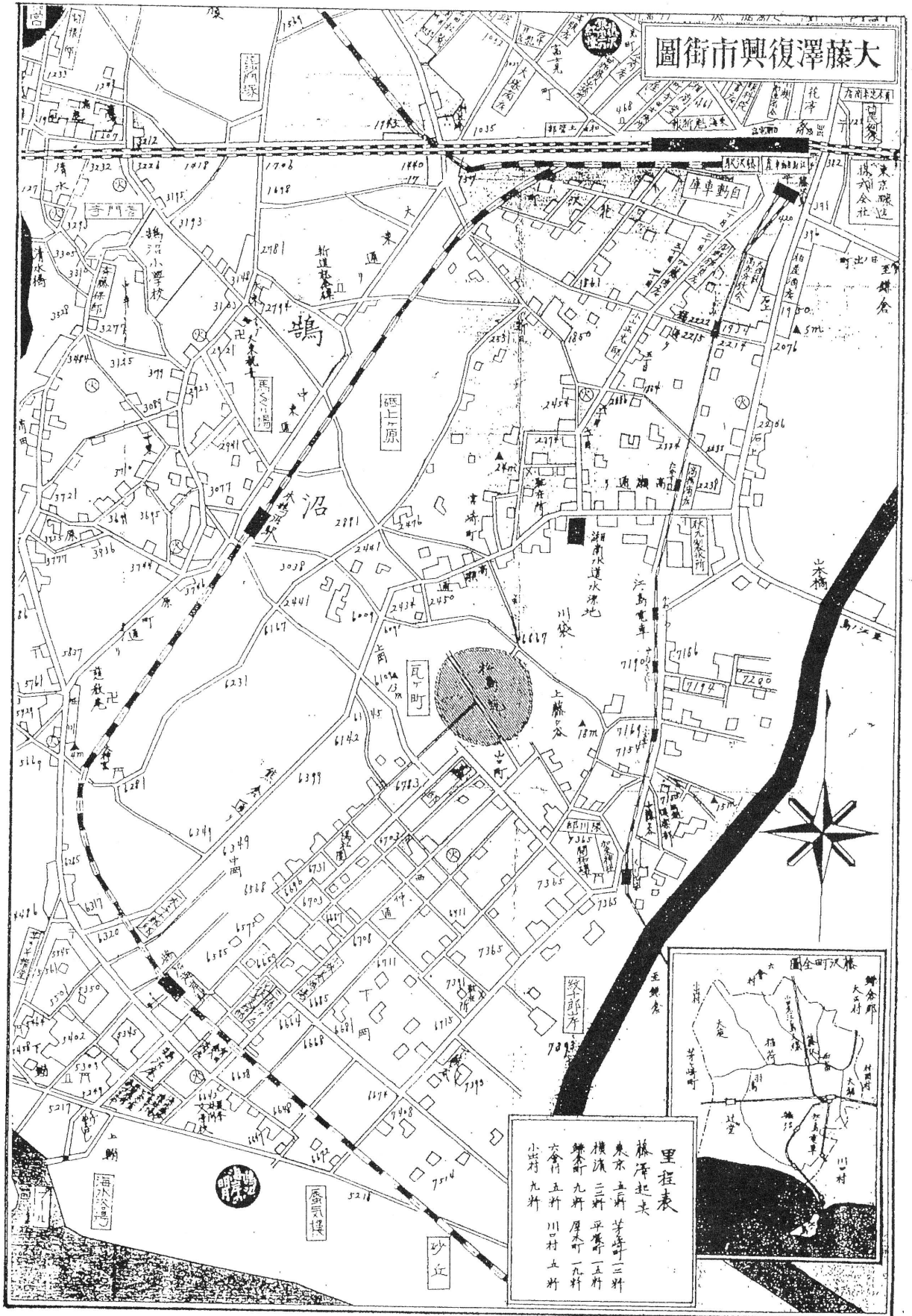
今後の見込みが立たないままに現在に至っている。

同57年、駅南部区画整理事業が完了し、駅前ロータリー、江ノ電の高架、南口に屋根つき連絡橋の完成、江ノ電デパートの開店など橘通りの周辺は面目を一新した。地番も鵜沼東花立〇番地から鵜沼橘一丁目〇番地というような新地番に改められた。

橘通りは、駅の近くにはビルが並ぶが、道路が狭く大型車両が通らず閑静で、また駅にも近いなど住環境が優れており、マンションの建設が相次いでいる。

橘通り商店会の会員は、現在60店であるが入れ替わりが激しく、3分の2は最近10年間に進出した店である。この傾向は大手スーパー、コンビニが相次いで進出した昭和50年代から顕著になっている。商店会は、集客対策に知恵を絞っているが、今年2月に駅南口ロータリーから橘通りに入るところに設置したシンボルタワーもその一つである。

大藤澤復興市街圖



里程表

藤澤起末
 東京五所 茅崎町二所
 横濱三所 平塚町一五所
 鎌倉九所 厚木町一九所
 小田五所 川口村五所





← 橋通りのシンボルタワー



旧後藤医院→

岸田劉生の「鵠沼風景」

－「藤沢の山」か「片瀬の山」か－

伊藤 聖（会員）

1. はじめに

平成13年（2001年）春、鎌倉の神奈川県立近代美術館で生誕 110年「岸田劉生展」が開催された。そのときのカタログに「鵠沼風景を描いた作品に、比較的構図の似た風景画が多いのは、静物画や肖像画を手がける一方で、天気によければ風景を描くといった具合で、遠くに写生に行かず、家のすぐ近くか、部屋からの景色を描いたためだ。（中略）右手に見える小高い山は、北側の藤沢か片瀬のあたりの小高い丘陵の一角なのではないかと思われる」（P. 84）と書いてあった。

また「窓外夏景」の解説には次のように書かれている。

「松本別荘の2階の劉生が書斎兼寝室としていた部屋から見える風景。鵠沼時代の風景画には、この部屋からの眺めのものが多い。横堀角次郎によれば、この部屋の窓は北向きにあったというから、藤沢の方を見ているのであろう（「鵠沼時代の思ひ出」1930年）。麗子がその著書『父 岸田劉生』（1962年、雪華社）のなかで、劉生の声が山彦になって帰ってきたと語っている藤沢方面の山は、この右手の小高い丘のことをいっているのかもしれない」（P. 124）。

どちらも慎重な言い回しではあるが「藤沢の山」という可能性を否定していない。はたして「藤沢の山」なのか「片瀬の山」なのか、はっきりさせたいというのが本稿を書いた目的である。

2. 松本別荘について

劉生が病氣療養のため、鵠沼に転地してきたのは大正6年（1917年）2月23日で、これから劉生の創作活動の最も充実した「鵠沼時代」が始まる。

神奈川県立近代美術館のカタログによると「最初の家は、海にやや近い佐藤別荘（現在の鵠沼松が岡 2-23）¹⁾と呼ばれるところであったが、北向きの窓がないという理由から、まもなく近くの松本別荘に転居。二番目の松本別荘の住所は、神奈川県高座郡藤沢町鵠沼字下岡 6734 番地。現在の藤沢市鵠沼松が岡 4-7-14 付近である」と書いてある。



「早春之一日」（1920年3月）



現在の片瀬丘陵（2002年9月、青木悠会員撮影）

カタログの佐藤別荘と松本別荘の住居表記は間違っていて、佐藤別荘は「鵠沼松が岡 3-23」、松本別荘は「鵠沼松が岡 4-7-10」が正しい。

松本別荘は「松本陽松苑」とも呼ばれていて、東京のもめん太物商の松本直祐という人の別荘だった。千坪近い広い敷地の中央に私道が通っていて、突き当たりが松本氏本人の別荘、道の右側に4軒、左側に2軒の貸別荘があった。

劉生が借りた「洋館の2階建て」は私道の一番手前右側で、その特徴のある外観から「火見櫓^{ひのみやぐら}」と地元では親しまれていた。この洋館は関東大震災で傾いたが倒壊を免れ、修復されて昭和36年ごろまで残っていた。したがって記憶している人も多く、右ページにその復原図を載せておいた²⁾。

まだ茅葺屋根が点在する大正時代の海辺で、この瀟洒な建物はさぞ人目をひいたことであろう。現在、かつて劉生が住んだ貸別荘の敷地跡には、4軒の家屋が建っている。

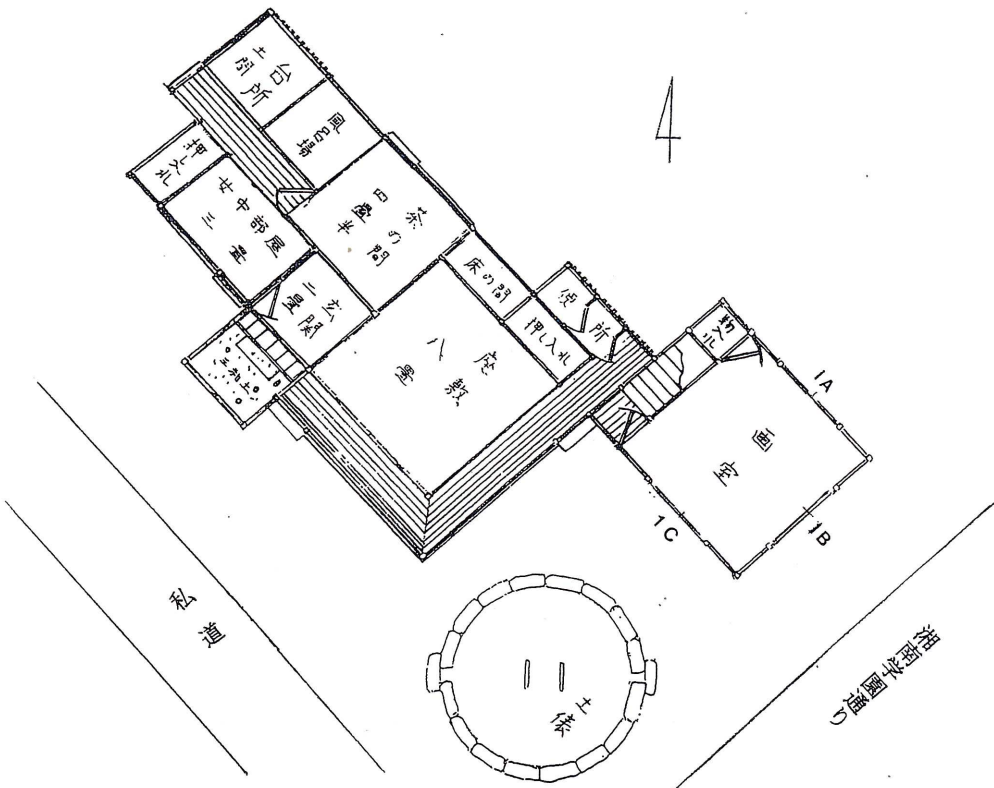
この洋館の前を劉生の鵠沼風景にも描かれているやや広い農道が通っていた。この農道はのちに拡張されて、小田急鵠沼海岸駅から湘南学園への通学路となっている。いまの「湘南学園通り」である。もっとも当時は、小田急線が開通していなかったから、劉生宅へは江ノ電の鵠沼駅から12分ほどの道を歩かなければならなかった。

通学路自体が真北から43度東へ斜めに振れていて、道路に面した劉生の洋館もまた南東に面していた。松本別荘の間取り（推定）については、劉生の孫の岸田夏子さんと川戸マツさん（劉生「村娘」のモデル、91歳で健在）の協力によって「鵠沼」77号（1998年）に発表されているので、その図（右ページ下）と説明文を引用させてもらう。ただし図も下の説明も一部を修正した。

図の南西に向いた玄関を入るとすぐ右手に回廊状の縁側があつて、それは8畳の座敷を巡るようにして北東側で行き止まりになっている。その突き当たった右手に画室へ入るドアがあつた。この画室の部分だけがいわゆる洋風建築になっていて、鵠沼では当時、唯一の2階建て洋館といわれた。2階が畳敷き、1階がリノリウムを敷いた洋間で、劉生はこの1階をアトリエにし、2階を書斎にあてた。外光を調節するため、南東と南西側の窓を布でふさぎ、室内には北光線だけを取り入れた。

窓の位置は重要なので確認しておく、1階は北東・南東・南西の3か所に窓があつたことが分かる。それぞれ1 A、1 B、1 Cと図に記入しておく。

岸田劉生のアトリエ復元図



「2階は先生の部屋でしたから、上がったことはありませんが、窓は1階も2階も同じような位置にありました」とマツさんはいう。この2階の北側の窓（2Aとする）から多くの鵠沼風景が描かれた。

3. 鵠沼風景について

劉生の鵠沼時代を代表するのが、麗子シリーズと鵠沼風景シリーズであることは異論がない。麗子像については「鵠沼」26号（1985年）に伊藤節堂さんが30点ほどをまとめられているので、ここでは鵠沼風景について調べてみた。右の表のように、こちらも30点ほどが確認されている。このうち問題の「小高い丘」が描かれているものには※を付けておいたが、半数以上の18点にもなる。いかに劉生がこの丘を気に入っていたかが分かる。

初期の「代々木付近」から晩年の「大連星ヶ浦風景」まで、劉生は好んで切り通しや崖を描いている。切りとられた形の面白さとともに、赤い土の色彩がアクセントとして、劉生の興味をひいたのであろう。鵠沼風景の小高い丘も、削りとられて露出した赤土が、なによりも先に目に飛び込んでくる。関東ローム層と思われるこの赤土の特徴が、場所の特定には役立ちそうである。

さきに引用したように、この丘が「藤沢方面の山」と思われたのは、麗子の記憶によるところが大きい。関東大震災のときも「松本さんの山³⁾へ逃げようといって、麗子おいで、と父は呼ぶ。母はあんな低い所じゃだめですよ、といっている。実際それは山などというものではなく、ただ小高い所に松が生えているというにすぎないものなのだ。そして結局風景の中でよく描く藤沢の方の山をめざして逃げることになった」（岸田麗子『父 岸田劉生』P.181）

ここで、もう一人の証人に登場してもらおう。地元鵠沼で育った作家今井達夫の「鵠沼物語」⁴⁾に、こういう文章がある。少し長いがそのまま引用する。

中学生時代こんな経験を私は持っている。劉生一樁⁵⁾の通路の途中に小さな三角の水田が残っていた。その水田の端で宿題の水彩画を描いていると、あとからやってきた劉生が私とならんで絵具箱をひらいた。私は彼がどんな風に描くか興味を抱いて注視していたが、途中で声をかけずにいられなくなった。

「岸田さん、あすこの電信柱がないじゃありませんか」

すると度のつよい近眼鏡を光らせて私を見た劉生の口から、たったひと言が力づくで洩れた。

岸田劉生の「鵠沼風景」

劉生が鵠沼の佐藤別荘へ移ったのは、大正6年（1917）2月23日で、6月24日には洋館の松本別荘に転居している。窓は洋館の窓から、外は戸外での写生。※は片瀬山と思われる丘が描かれている風景。

1. 鵠沼風景	1917. 4. 12	油彩	33.0×24.0	外	
2. kugenuma	1917. 5. 3	水彩	18.3×14.2	外	
3. 初夏の小路	1917. 5. 17	油彩	44.5×36.5	外	第4回二科展 第5回草土社展
4. 二階よりのスケッチ	1917. 6. 27	水彩	19.2×23.9	※窓	
5. 二階の窓よりの風景	1917. 9. 20	油彩	46.0×55.0	※窓	第5回草土社展
6. 晩秋の霽日	1917. 11. 15	油彩	37.5×45.3	※外	第5回草土社展
7. 道に生へたる枯草	1917. 12. 10	油彩	45.5×36.5	外	第5回草土社展
8. 風景（鵠沼）	1918. 3. 31	油彩	不詳（8号）	※外	土方定一『岸田劉生』口絵
9. 雲雀鳴日	1918. 4. 12	油彩	44.5×52.0	※外	第6回草土社展
10. 晩春の草道	1918. 4. 30	油彩	43.5×36.0	外	第5回二科展
11. 五月の砂道	1918. 5. 16	油彩	31.6×41.0	※外	第6回草土社展
12. 朝の道のスケッチ	1919.	油彩	24.0×32.5	外	
13. 鵠沼風景	1920. 1. 27	水彩	25.2×33.0	※窓	
14. 麦二三寸	1920. 3. 16	油彩	37.5×45.0	※外	第8回草土社展
15. 早春之一日	1920. 3. [27]	油彩	33.2×45.0	※外	第8回草土社展
16. 路傍初夏	1920. 5. 17	油彩	37.6×45.2	外	
17. 初夏の麦畑と石垣	1920. 5. 30	油彩	38.0×45.2	外	岸田劉生展（1970）
18. 六月風景	1920. 6. 1	油彩	30.6×40.0	※外	第8回草土社展
19. 窓外夏景	1921. 7. 20	油彩	37.9×45.0	※窓	
20. 二階窓外秋景	1921. 10. 5	水彩	25.8×34.3	※窓	
21. 石垣のある道	1921	油彩	50.5×60.0	外	
22. 窓外早春	1922. 3. 30	油彩	45.5×53.0	※窓	
23. 或る路	1922. 7. 13	油彩	45.5×37.9	外	
24. 窓外夏景	1922. 7. 13	油彩	27.0×40.9	※外	
25. 夏之路	1922. 7. 20	油彩	45.6×37.5	外	
26. 立秋之霽日（八月風景）	1922. 8. 8	油彩	39.5×52.0	※窓	第9回草土社展
27. 鵠沼窓外風景	1922	油彩	23.8×33.0	※窓	
28. 早春霽日	1923. 3. 28	油彩	44.0×52.0	※窓	第1回春陽会展
29. 晩夏午后	1923. 8. 31	油彩	38.0×45.3	※窓	
30. 風景（鵠沼）	年代不詳	油彩	32.8×23.8	外	

このほか、紙本墨画淡彩の「鵠沼小景」（1922～23年）が数点ある。

「いらんものは、いらん」

そのひと言は、雷のように私のなかを走りすぎた。そのいらぬ電柱とは――午後の日射しの当たっている片瀬の山を描こうとすると、すぐ近い位置にあって邪魔になっていたそのことであつた。

この三角の水田の端で描いた風景は、おそらく「早春之一日」（49ページ）であろう。もちろん邪魔な電柱は一本もない。この絵には、もうすっかりみられなくなった麦の風除けが描かれていて、早春の強風に、砂丘の砂塵が家々に舞い込んでいたころの昔の鵠沼を思い出させる。私の好きな「鵠沼風景」である。

4. 「片瀬の山」は駒立山か

今井達夫は小学生時代から鵠沼で生活していた作家だから、片瀬の山を藤沢の山と見誤ることはまずないと思われる。片瀬の山とすると、どの山がそれに該当するだろうか。

劉生がいたころの大正12年（1921年）の地図をみると、境川（片瀬川）の東側を川筋に沿って低い丘陵が走っている。これが一般に「片瀬山」と総称されている山々である。その丘陵の最北端に69.2メートルの三角点が見える。地元のひとは「駒立山」と呼んでいるが、元の地図には山名が入っていなかったのも、右ページの地図には記入しておいた。洋館の2階の窓2Aからは、正面より15度右にみえた山である。

この山の西側をみると等高線が密集していて、ここが断崖になっていることが分かる。これは明治35年（1902年）に藤沢一片瀬間に江ノ電が敷設されたとき、路線用の土砂を取った跡なのである。このあたりは土地が低く、境川が氾濫するたびに川筋が変化した。いまでも「川袋」という地名が残っている。それでそこに江ノ電を通すために多量の埋立ての土砂が必要になって、片瀬山が削られたのであつた。劉生の赤土の小山は、この駒立山である可能性が大きい。

劉生の絵には、さらに右側にもやや低い赤土の山が見える。これも地元で「赤山」と呼ばれている山であると思われる。こちらも山名を記入しておいた。駒立山と赤山の中間には、片瀬山から流れ出る小川のある谷戸があるが、劉生の「窓外夏景」（前表の19と24）や「晩夏午後」などにも、この谷戸らしいものがみられる。

もし藤沢の山とすると、市役所のある若尾山が候補の一つに考えられるが、こ

れは全くの砂山であるから、絵のような赤い色をみせることはない。それに麗子は「劉生の声が山彦となって帰ってきた」といっているが、山彦が帰ってくるには松本別荘から2,3キロあって少し遠すぎるし、砂丘から山彦が帰ってくるとは思えない。駒立山なら、松本別荘との距離は1.4キロで、散歩の途中からだとする断崖まで1キロ前後だから、山彦は6秒くらいで戻ってきただろう。それにしても昔の鵠沼は静かだった！

以上のことから「鵠沼風景」の小高い赤土の山は、片瀬丘陵のなかの駒立山とみていいのではないかと思われる。

注¹⁾ 鵠沼松が岡2丁目は19番地までしかないから、2丁目23番地は3丁目23番地のミスプリントであろう。3丁目は27番地までである。

なお佐藤別荘の所在地を、土方定一『岸田劉生』（昭和61年改訂新版）の年譜では「藤沢町大字鵠沼（旧・字下藤ヶ谷）7365番地（現在の藤沢市鵠沼松が岡2丁目1番－5番）」としている。ここは佐藤氏本人の「芳藤苑」という別荘があったところで、一時、武者小路実篤もその貸別荘に住んだことがあり、大正4年ここで戯曲「その妹」を書いたという（「鵠沼」20号による。ただし異説もある）。

劉生が借りた佐藤別荘は、麗子が「はじめての家は海に近くて」と書いているように、もっと海岸寄りにあった。両方とも佐藤長四郎という人の貸別荘であったため混同されたようである。

- ²⁾ 会員の佐藤和子さん、野口ゆくえさん、劉生のモデル川戸マツさんらの協力による。
- ³⁾ 私道の奥には松本氏本人の別荘があって、そこは少し小高い砂丘になっていた。しかし劉生の洋館より、せいぜい1－2メートル高い程度であった。
- ⁴⁾ 慶応大学の卒業生をメンバーとする理財クラブの雑誌「理財」に4回連載された今井達夫の回顧録。
- ⁵⁾ 椿貞雄のこと。椿は劉生と同じ草土社に所属、劉生の鵠沼転居と同じころに自分も鵠沼に移って、当時は八軒別荘に住んでいた。

追記 劉生宅の間取り、アトリエの復元については、今年9月17日－29日、藤沢市民ギャラリーで開かれた「華ひらいた鵠沼文化展」で、岡田哲明会員よって詳細な研究が発表された。いずれ会誌にも掲載される予定であるが、この文の復元図などは「鵠沼」77号によったものである。

昭和 20 年 3 月 10 日

— 鵠沼と東京 —

長谷川 襄二（鵠沼桜が岡在住）

わが家の玄関にアメリカ兵

昭和20年3月9日（金）の夜、アメリカ軍爆撃機の大編隊が駿河湾上空を目指しているとの情報で、ラジオから警戒警報が告げられると同時に、鵠沼地区にも警戒警報が鳴り響いた。電灯の明かりが漏れないよう点検をして就寝する。しばらくしてラジオと同時に空襲警報が鳴り、万が一を考えて地下防空壕に退避する準備をした。

やがて東京方面の夜空が爆撃の火災で明るくなり、情報のない当時のわれわれには、その現象が如何なる出来事であるかは、その時点では想像すらできなかった。

わが家には、父の勤務先（日本橋の三井物産本社）の都合で、業務用として電話が架設されていたので、鵠沼地区の第4警防団本部に、電話のある4畳半と3畳の部屋を貸していた。したがって家族にとっては、警防団の方々が毎日詰めておられるので、安心感があったのも事実であった。それらの方々は地元の農家、あるいは商家のご主人たちであって、若い成人男子は出征しているか、勤務されているかであった。夜半過ぎに、アメリカ軍の爆撃機は逃避し、警報も解除されて、いつもの夜明けとなった。

翌10日の朝方、この日にかぎって玄関先は警防団の方々と騒がしくなった。急いで出向くと、玄関内の一坪の土間に、茶色の薄手の航空服を着た若いアメリカ兵が、仰向けに横たえられていた。と、そのとき、背後から「早く憲兵隊に連絡せんか！」と、大声で警防団の人に怒鳴る叔父が立っていた。

この一喝で、叔父の気迫に一瞬ひるんだ警防団の人々は、すぐ玄関を締めて、集まった人々を門外に追い出し、適切に処置をされた。その際、アメリカ兵から外されてあった落下傘の布は、庭で一部の人々の腹いせで、処理をされたようだった。

叔父は小柄ではあるが恰幅がよく、北大畜産科の講師だったが、たまたま上京してわが家に泊まっていたのだった。昭和12年の日支事変に、赤羽の工兵連

隊の中尉として一年間、出征した経験があったのと、北大予科時代には、応援団長をしていたので、大声は地声であった。

アメリカ兵が捕らえられていたのは、小田急線本鵠沼駅の藤沢寄りの踏切わきで、そばの木にぶら下がっていたのを、引きずり降ろしたといわれていた。そのときは、すでに死亡してのではないかと想像している。わが家の玄関の下駄箱の戸には僅かな血痕が付いていた。この事件は、なぜかその日は話題にもならず、ただ同じその日に、海岸の遊歩道路（いまの 134号線）を歩いていた別のアメリカ兵が捕らえられたといわれていた。

技術力の差を目のあたりに

当時、私の心情としては、アメリカ兵をみた瞬間、「敵愾心」は全くなく、ただ「本当だ」と思った。何を「本当だ」と思ったのか。それはアメリカ兵の「薄手の飛行服」にあった。

当時のわれわれ学徒が知りうる情報として、アメリカ軍の爆撃機は地上1万メートルの成層圏を飛行できる気密構造になっているが、日本の戦闘機では、その高さまで上昇することができないし、高射砲の弾もその高空までは届かないとされていた。したがって、彼らの爆撃機の機内温度が常温であるがゆえに、「薄手の飛行服」が可能であるという、歴然とした「技術の差」が、情報通りであったということに脳天を打たれた。

当時の日本の航空兵の姿は、兎の毛皮を帽子や衣服の内側に付けていたため、全身が膨れ上がった格好ではあったが、凛々しく頼もしい姿が、よく雑誌や新聞に写真が掲載されていた。その日、アメリカ軍機を撃墜したのは、日本の戦闘機か高射砲かは不明であった。

当時、この事件が大きくならなかった理由として、私は一つには「技術の差」が歴然と分かったことと、「敵愾心」がなかったことで沈黙したこと。また一つには警防団の人々がアメリカ兵を処置したとき、あまりにも若い航空兵の姿に「わが子」が重なったのではないかと判断している。

この事件に関して、戦後、アメリカ進駐軍の調査があったということを聞いておらず、今回、この事件を証明できる資料を藤沢市文書館などで調査をしたが、終戦時に全てが破棄されていて、なにも残されてはいなかった。また、藤沢警察署に出向いても同様であった。終戦後、アメリカ軍は自国の行方不明の

兵士の消息を徹底的に調査しているので、本件についても米軍関係を調査すれば、何か分かるかも知れないが……。

ただし、当時私が住んでいた家（現みずは銀行出張所）の隣人の浅場たつゑさんが健在で、同じ場所に住んでおられることを、小学校の同期生である関根ツル子さんから教えていただき、過日訪問して（平成14年1月18日）証言を得ている。

東京では8万人以上の死者

3月10日の東京大空襲は、戦後の調査、並びに当時からの調査によると、先ず下町周辺に焼夷弾を投下してから、中を焼夷弾で焼き尽くすことで、殆ど非戦闘員である住民が犠牲になった。この空襲は、正にアメリカ軍による非道な行為であった。死者約 83,700 余人（東京都の犠牲者約 96,000 人）。

当時、私の家内は家族と深川の菊川町に住んでいて、この空襲に遭遇した。両親と兄・弟2人・妹2人の8人で猛火のなかを逃げ回ったが、母と末の妹の2人を失う悲劇となった。わが家では「3月10日」のことは「一切聞かない、言わない」ことにしている。

なお、広島・長崎の原爆犠牲者については、国を挙げてこれを悼み、供養をされているが、原爆で一瞬のうちに昇天された方々と、3月10日のように回りに迫る火災で逃場がなく、徐々に焼死された方々とを比べ、何れが残酷非道であるのか！

この結果、東京都では平成11年度から東京空襲の犠牲者名簿の作成に取り組まれ、13年3月「東京空襲犠牲者を追悼し 平和を記念する碑」を都立横網町公園（大正12年の関東大震災の遭難者慰霊堂と復興記念碑のある公園）に建設し、名簿を奉納、当然、母と末妹も名簿に記載された。

ニェアールの生地 昆明市訪問

関根 久男（会員）

2001年は藤沢市と中国昆明市が友好都市提携をしてから20周年の節目にあたり、これを記念して、藤沢市民訪問団が11月初旬に昆明を訪問しました。藤沢と昆明、この両市を結びつけた偉大な芸術家ニェアール（聶耳）について、そして市民訪問団の様子などを記してみたいと思います。

<昆明市の位置>

昆明市は中国雲南省の省都で、中国西南高原の中部に位置する海拔 1900 m の都市です。面積は21,111平方km、人口は 467万人余、そのうち64万余は25の少数民族であり、約13.7%を占めています。雲南省は、ミャンマー、ラオス、ベトナムなどと国境を接し、二千年前から陸路の「西南シルクロード」で東南アジア諸国と結ばれる交通の要衝でした。

<ニェアールの水難事故>

戦後の1948年ごろ、外国の新聞に次のような記事が報じられました。それは上海で活躍していた中国の若き音楽家ニェアールが、来日中の1935年7月、藤沢市鵠沼海岸で遊泳中、不幸にも23歳の若さで水死したというものでした。

その記事を読んだ市内の有志が、日中友好のため、遭難の詳しい状況を調べたり、ニェアールの作品が登場する映画を上映しようと活動を始めました。そして手始めに、遭難当時に遺体の収容にあたった古老の話を聞き取ったりしました。

1935年、ニェアールは友人の招きで来日し、7月17日立ち寄った友人宅近くの鵠沼海岸で遊泳中、折からの激しい波に襲われ、行方不明になりました。翌18日午前5時半ごろ、海水浴場監視員の森井亀之助氏が海に出掛けていくと、無残な姿で浜に打ち上げられていたニェアールを発見したとのことでした。

ニェアールの遺体は茶毘に付され、同郷の作家張鶴氏に抱かれて帰国し、その後、生まれ故郷昆明西郊の西山に手厚く葬られたとのことでした。

<ニェアール記念碑建設>

さまざまな経過を経て、ニェアールの映画は済美館（現在の藤沢市公民館別館）で上映され、多くの市民が鑑賞しました。この運動がその後、遭難現場の鵠沼海岸に日中の平和を願うニェアール記念碑建設運動へと発展し、藤沢市議会への記念碑の建設申し立て、市民各層への働きかけにつながり、正式に建設運動が始まって、日中の草の根外交へと発展していったのです。

記念碑は有志のカンパおよび藤沢市の助成金などにより、1954年11月1日に完成し、中国紅十字会会長李徳全女史を迎え、日中友好を願う多くの人々が参列して、盛大に除幕式が行なわれました。そして、この運動が後の藤沢市と昆明市の友好都市提携へ続いていくのです。

<ニェアールと中国国歌>

ニェアールは1912年昆明市に生まれ、主に上海で活躍しました。後に中華人民共和国の国歌となった「義勇軍行進曲」の作曲者として知られています。この曲は、当時日本の武力侵略を受けていた中国で、抗日映画として制作された「風雲児女」の挿入歌であり、田漢が詞をつけて、中国人民解放を謳いあげたものです。その詞の内容は次の通りです。

「起て！ 奴隷となるな人民！

われらが血と肉で新しい長城を築こう！

いま中国民族は最大の危機にある。

一人ひとりが最後の雄叫びをあげよう。

起て！ 心を一つにして 敵の砲火をかいくぐって 進め！ 進め！」

<中国侵略と昆明>

1937年、日本は北京郊外で、いわゆる「盧溝橋事件」を起こし、中国への全面的な武力侵攻を開始しました。南京大虐殺は、この年の12月から翌年1月にかけて行われました。国民政府は南京を放棄し、政府機関を武漢、そして重慶に移さざるをえなかったのです。また北京大学などの最高学府も昆明に移り、西南総合大学となりました。その跡を雲南師範大学にみることができます。

1938年、雲南・ビルマ（現在のミャンマー）を結ぶ道路が開通し、外国から

昆明や重慶へ武器などの支援が始まると、日本軍は「援蒋ルート」を遮断するため、昆明への空爆を開始し、もう一つの重要ルートであった昆明・ハノイ鉄道（現昆河鉄道）も空爆により徹底的に破壊しました。いま昆明の西山には、この「援蒋ルート」で支援物資の輸送にあたった南洋架橋義勇軍の功績を称える記念碑が建っています。

<雲南地区への日本の支援>

現在、雲南地区の貧困地区に対し、多くの教育支援が行われています。そのなかには雲南西部に進入した元日本兵の建設した希望学校もあり、それらの方々が、この地区からの訪日団を出迎える風景が、時折みうけられるとのことでした。こうした過去の反省にたった日本側の誠意が、民間の草の根レベルとはいえ、定着しつつあることは喜ばしいことであります。

<藤沢と昆明の友好都市提携>

藤沢市と昆明市は1981年11月5日、友好都市提携議定書に調印し、現在も友情あふれる交流が続いています。今回の友好都市提携20周年藤沢市民訪問団には、213 人もの市民が参加しました。

11月4日午後2時30分、「熱烈歓迎」の横幕が張られた昆明空港に到着。白バイの先導によって市内へ。「国賓並みですね」と一同、中国側の配慮を感じました。市内到着して博物館などを見学後、記念式典前夜祭に参加し、中国伝統の歌や踊りを楽しみ、ふたたび白バイ先導でホテルへ戻りました。

翌5日、晴天に恵まれた美しい昆明湖のほとり、西山を背景に行かれたニューアールの墓前式典に出席し、献花、記念植樹などを行いました。終了後、西山に登り、頂上から眺める広大な風景に一同しばし時を忘れて見とれました。

午後、雲南民俗村を見学し、中国西南部特有の風俗文化に触れることができました。つぎに藤沢市民のカンパと藤沢市の助成により完成した「友誼館」を訪問、折から開催中の中日文化交流展を見学しました。

夜は今回の主要目的である友好都市提携20周年式典が佳華広場宴会場で盛大に開催されました。両市代表のあいさつ、各層の交流などがあり、両市の深い友情と、子々孫々にわたる友誼を誓い合うなど、有意義な昆明市訪問でした。

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成14年4月～平成14年9月)

総務委員会

平成14年4月例会 4月9日(火) 10時～12時 25名出席

議題1. 5月総会の準備について－3月13日川上会長急逝のため、5月総会まで伊藤副会長が会長代行となる。総会の議事録は伊藤会長代行が主として作成する。

2. 市広報番組「藤沢パステルタイム－海光るわが故里」について－

4月12日(金) 鵠南市民の家にて撮影され、19日～25日間JCOM－湘南にて放映された。

3. 会誌「鵠沼」84号の配布について－配布表によって配布担当者を決めた。特に今回は故川上会長追悼号でもあり川上夫人に30部贈呈する。

運営委員会 4月30日(火) 12名出席

第16回総会 平成14年5月例会 5月14日(火) 10時～12時 24名出席

第16回総会－新任神崎館長、猪俣館長補佐が出席し挨拶した。神崎館長によれば、昨年の公民館まつりの「華ひらいた鵠沼文化」展示を、9月中旬に市民ギャラリー常設展示室において行うことが決まったとのこと。

別紙「第16回総会議案書」の審議を行い、全会一致で議案が可決された。

また伊藤会長代行が会長に選任され、任期は前会長の残りの1年とした。

5月例会. 議題1. 「鵠沼の緑と文化財を守る会」の発足総会について－4月21日(日) 午後 出席者20名で、会則及び予算案の決定、役員の選出等を行ったと中島会員より報告があった。

2. 今後の例会運営について－史跡めぐりは例年通り行うこととし、担当は企画委員とする。事務連絡だけの例会にしないで「戦争と鵠沼」といった戦前、戦後の体験談を話してもらったり、「昔の鵠沼」について語ってもらう「お話」の時間を設けるようにする。

運営委員会 5月28日(火) 11名出席

平成14年6月例会 6月11日(火) 10時～12時 21名出席

議題1. 市民ギャラリーの「鵠沼文化展」について－懸案の「鵠沼文化展」が6月4日に市側担当者との協議によって、9月17日～9月29日間に市民ギャラリー常設展示室において行うことに決定した。また、内容については、昨年の公民館まつりに展示したものに、文書館に収蔵されている葛巻文庫を

加えたものという提案があったが、詳細については運営委員会で決めることにした。

2. 公民館センターの郷土資料室について－来年7月開設予定の資料室は館長の意向で「公設民営」とのことだが、これでは会の負担も大きくなるとのことで、準備委員が中心になって近隣の同様な資料室の運営等を調べるなどして、公民館と更に協議することにした。

3. 会誌「鵠沼」85号について－「蓮池特集」とする。その誕生と移り変わり、現状等について、桑原、渡部両委員に執筆を依頼した。

4. 「語る会」のホームページについて－渡部委員より、会のホームページを近く開設予定との報告と、何を情報公開するかホームページ委員会で決めるとの発言があった。また杉本委員より会誌「鵠沼」の全てをCD-ROM化しているとの報告がなされた。

お話－内田会員から「私の接した鵠沼の音楽人」の話があった。

運営委員会 6月25日（火） 13名出席

平成14年7月例会 7月7日（火）10時～12時 22名出席

議題 1. 市民ギャラリーの展示について－展示テーマを「華ひらいた鵠沼文化展－東屋、劉生、龍之介」とし、企画担当の内藤会員より常設展示室内の詳細な展示計画図の説明があった。

昨年の公民館まつりの展示に、新たに岸田劉生と鵠沼南部開発史を加えて、東屋、芥川龍之介と葛巻文庫の5コーナーで構成し、それぞれに運営委員の担当を決めて展示物の作成や、展示の企画立案を行うことにした。

2. サークル交歓会について－10月17日（土）のシンポジウムと、10月26日（土）、27日（日）に行われる第26回鵠沼地区公民館まつりについて佐藤委員より報告があった。

3. 秋の公民館まつりにについて－「印半纏と別荘」をテーマに鵠沼の別荘に出入りしていた職人達を、印半纏を展示して明らかにする。企画担当の内田会員が準備することになった。

4. 江の島探訪倶楽部の「鵠沼文学散歩」について－江の島探訪倶楽部から「鵠沼文学散歩」を10月17日（金）に行いたいのが、語る会に協力してもらいたいとの要請があった。「鵠沼文学地図」の調査作成中でもあり会として協力することになり、伊藤会長、中島会員が担当する。

5. その他－鵠中文化祭に「鵠沼の歴史」展示を行うことについて本来生徒

主体でやるべきものとの異議もあったが、中学生に郷土史を広めるものであるとのことで、文化展もあり有志の会員で協力することになった。

お話－狹倉会員より「橋通りの変遷」について話があった。

運営委員会 7月30日（火） 12名出席

平成14年8月例会 8月13日（火）10時～12時 22名出席

議題 1. 市民ギャラリーの文化展について－文化展の主催が、鶴沼を語る会、藤沢市教育委員会、協力－藤沢市文書館 連絡先－鶴沼公民館と正式に決まり、市記者クラブの記者発表用のリーフレット、及びチラシ、ポスターを作成したことを内藤委員が説明。経費面について会としていくら出せるか検討した。8月28日～30日まで文化展準備のため鶴沼市民の家を予約する。

2. 「鶴沼文学散歩」について－10月17日午前中は「語る会」による「東屋、龍之介、蜷気楼、劉生」についての講義、午後から江の島探訪倶楽部員による「文学散歩」の案内に決まる。

散歩コースも中島会員の企画で公民館から賀来神社までの約3.5kmとした。

3. 「鶴沼」85号の発行日について－「鶴沼文化展」が9月末日まで行われるので、85号の発行日を1か月遅らせて10月30日にすることにした。

4. その他 鶴中文化展は学校教育に長い経験がある渡部会員が主として担当となる。

紹介－渡部会員による「鶴沼を語る会」のホームページ紹介があった。

運営委員会 8月20日（火）出席11名 8月27日（火）出席11名

平成14年9月例会 9月10日（火）10時～12時 出席者22名

議題 1. 市民ギャラリーの文化展について－市民ギャラリーの開場時間は10時～19時で、会期12日間 午前、午後に分けて2人ずつの会場当番を決め当番表を作成した。また9月11日（水）展示作業、9月16日（月）にプレオープンし当番担当者へ展示内容の説明を行うことと、9月30日（月）には終了後の撤去作業等を行う日程を確認した。9月3日（火）には、市の記者クラブで「文化展」の記者発表が行われ、中央紙のサンケイ、朝日、毎日、東京の4社が出席した。市内のミニコミ紙については、担当者を定めてそれぞれ「文化展」の情報提供を行った。

2. 「鶴沼文学散歩」について－江の島探訪倶楽部との打合わせで、10月4日（金）午後に先方の案内担当者と実際に歩いてコースを案内することに

なった。

3. その他－(1) 文化展のチラシを大量に印刷し、駅構内等に配置し、ポスターは市の公民館、図書館等へ生涯学習課の太田主管が手配するとのこと。

(2) 来場者の記名はもらわず、感想等を記入するアンケート用紙を置くことにした。

追記－「鵠沼を語る会」創立に尽力された番場定八氏（番場定孝会員実父）10月3日死去されました。

「華ひらいた鵠沼文化展－東屋、劉生、龍之介」について

9月16日（月）14時プレオープン、当番会員を中心に15名参加し各コーナー担当者から展示内容の説明を聞いた。

開場期間－9月17日（火）～9月29日（日）（9月23日（月）は休館）の12日間は何日か雨が降ったが、連日大勢の来場者があり盛況であった。

「鵠沼文化展」について、市の広報や、ミニコミ各紙が報じた他、中央紙のサンケイ、毎日、読売、神奈川各紙の湘南版に大きく報道され、特にNHK-TVが25日朝二度にわたって関東甲信越ニュースで放映したため、ギャラリー事務局や、鵠沼公民館に問い合わせが殺到し、放映日の25日以降は連日300名を超える来場者があった。（J-COM湘南も27日から1週間放映）入場者総数は12日間で3200人、1日平均260人であった。西は愛知県、東は千葉県から遠路来場され、展示内容を熱心に1時間以上も鑑賞されたり、会員の説明に耳を傾けうなづく姿も多く見られた。非常に良い展示なので家族にも見せたいとか、じっくりと見たいと云われて二度三度も来場する人が多く見受けられた。

一公民館の歴史研究サークルである「鵠沼を語る会」が、市の中心部にある市民ギャラリー常設展示室で、12日間も展示会を行うことについて不安もあったが、市の生涯学習課の全面的な支援を得て、企画担当の内藤会員を中心に会の総力を挙げて製作した展示は、質も高く充実しており、全ての来場者に、香り高い「華ひらいた鵠沼文化」に触れてもらい、感銘、感動を与え、多数の来場者から謝辞と賛辞をいただき、「鵠沼文化展」が大成功したことを心から喜びたい。

編集後記

- *まず今回の85号の刊行が一ヶ月遅れたことをお詫びしなければなりません。
- *昨年の公民館祭りで展示した旅館「東屋」跡記念碑完成記念の作品が機縁となり、去る9月17日から29日にかけて藤沢市民ギャラリーで改めて＜華ひらく鵠沼文化＞―東屋・劉生・龍之介―を開くことになったからです。
- *おかげさまでこの展示会はNHKを初め多くのマスコミにも取りあげられ、大成功裡に終わりました。最初は入場者数の賭でもしようと呑気なことを言っていたのですが、開けてびっくり、もし賭でもしていたらスッテンテンになるところでした。
- *という次第ですが、最初から発行日を変えたことはよくなかったと反省しています。
- *さて今回は、新しく入会された渡辺、桑原両氏のおかげで“蓮池”を取り上げることができました。その形成過程にはまだまだ謎が残っているようですが、蓮池は兎にも角にも鵠沼唯一のピオトープを目指して、みんなで守っていかねばなりません。
- *大正時代から橘通り在住の梶倉氏による「橘通りの今昔」、高瀬通りと同じく高瀬弥一氏の私財を投じてつくられた主要道路ですが、高瀬家はこの他にも鵠沼の開発に有形無形の貢献をされています。いずれ本誌で特集したいと思っています。
- *岸田劉生の作品「早春之一日」に描かれた山はどの山か？ 伊藤氏ならではの濃やかな考証がなされました。劉生が長い間鵠沼で使ったアトリエも今は跡形もありません。「東屋」の「記念碑」とまでは願いませんが、せめて住居跡の「標識」ぐらいはと思います。
- *そして関根、長谷川氏の貴重な記録、85号もまた資料性の高いものになりました。(鈴木)

『鵠沼』 第85号

平成14年10月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001